ありふれたリアリティにロジックを

晴林墨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありふれたリアリティにロジックを

【Ｎコード】
Ｎ９３４６Ｘ

【作者名】
晴林塁

【あらすじ】
有名高校に通い、全国模試で一桁に入る程に成績優秀な葉倉イツキ。彼には幼い頃の記憶がなかった。イツキは好奇心から、自分の過去について調べ始める。そして自分が１０数年前に起こった、ある事件の当事者だという事を知る。自分は何者なのか、悩み苦しむイツキ。そんな彼の前に怪しい男が現れ、謎めいた言葉と共にイツキにひとつのフラッシュメモリを渡す。ひょんな事からそのメモリを起動してしまったイツキは、コンピュータが人間を管理する世界、《レイド》へと飛ばされてしまう。そこで出会った暴力的で気の強

い女の子や、電波全開の老人、エンコーダと呼ばれるあやしげな組織。《レイド》でイツキは自分に宿る能力を知り、様々な経験を通して、壮大な運命と自分の存在に立ち向かうことになる。

プロローグ（前書き）

初めての投稿です。
駄文ですが、よかったら感想なんかくれると、とってもうれしいです。

晴林塁

プロローグ

運命だとか宿命、そんなものはこの世界に存在しない。
この世界は実に白々しく今日も廻り続けるだけ。
“特別な何か”なんていつまで待ってもやってこない。
運命だとか宿命、そんなものはこの世界に存在しない。
だけど宇宙のどこかに――誰かの創った理は存在するのだ。

そうだ。キミにひとつだけ尋ねよう。
今君が感じている、それはただのリアリティか？
それとも本当のリアルかい？

俺は今でも自分が何者なのかを探し続けている。

ありふれたリアリティにロジックを

真実と自由への招待

［大量の返り血を浴びた身元不明の幼児保護される］

俺はディスプレイに表示された何年か前の新聞記事を食い入るように見つめていた。

練馬区石神井近くの神社境内で１３日、身元不明の男児一（推定３歳）が保護された。

発見当初、男児は裸で錯乱状態、体には大量の血液が付着していた。

練馬警察署などは男児がなんらかの事件に関与している疑いがあるとして詳しく事情を聴取する予定。

なお男児はショック状態で記憶障害をわずらっており、保護者も名乗り出ていない模様。

同署などは男児の回復を待つと共に、近隣住人などの目撃情報などを募っている。

続けて画面右横に、ピックアップされたこの事件の関連記事をクリックして同じように確認していく。今まで何度読んだだろう。記憶障害、無戸籍児、人身売買、拉致監禁、神隠し。物騒な言葉で綴られたそれはどれもが曖昧で真実を教えてくれることはない。どの記事も既に一字一句を記憶してしまっているのに、その活字からそれ以上の意味を読み取れやしないかと、俺は繰り返していた。

平日の午前中だというのに図書館はやたらと混みあっている。お年寄り、大学生、無論図書員も、一心不乱にそれぞれの作業に取り組んでいる。そのおかげか学生服の俺が紛れ込んでいても、誰も気にも留めない。それもそうか。普通、朝一から学校をサボるような学生はこんな所には来やしないのだろう。

俺は一通り記事に目を通してしまうと、大きく息を付き椅子に深くもたれかかった。
そっと目を閉じる。
長い間そうした後、閲覧ページを閉じ、端末を終了すると俺は図書館を後にした。

風が冷たい。公園の並木道はすっかり落ち葉に敷き詰められて金色に染まり、秋の始まりを告げていた。
空は一面に広がる灰色の雲に遮られ、太陽が顔を出すことを拒んでいる。そのせいか、まだ昼過ぎだというのに街は明け方のような色彩を放ち、ほんの少し別世界みたいに見えた。
ふいに足を止め、空を仰ぐ。

俺は元々、無戸籍の孤児だ。ちゃんと父も母もいるが、それはきっと俺を引き取ってくれた里親で、血は繋がっていない。どうやら父も母もそのことを俺に隠しているみたいだから、なんとなくその話題には触れないほうがいい気がして、自分からその話をしたことはないのだけれど。
それともうひとつ、俺には幼い頃の記憶がほとんどない。とは言っても小さい頃の記憶なんて誰もが忘れてしまうものだとは思う。それでも、断片的な思い出は誰にでもあるものだ。両親に連れられてどこへ行ったとか、幼稚園で先生に怒られて大泣きしたとか、そんな記憶。もちろん俺にもそんな覚えはある。でも、遡っていくと、ある一点で急に靄がかかったみたいに、あやふやになるのだ。
そこに何かがある。とても大事な何か。
強い衝動。
俺はどうしてもそれを知りたかった。
だから調べた。自分の出生を。戸籍を調べ、両親と血が繋がっていない事を知り、自分が半年程世話になったという施設を知るのは意外と簡単だった。

そして俺は、何年か前に起こった一つの事件を知ることになった。
自分がその事件の当事者だということも。
遺棄された身元不明の子供。
自分を知れば知るほどに、不安になった。ますますわからなくなった。
俺は、葉倉イツキという人間は、一体誰だ？

制服のポケットから手を出すと灰色の空へとかざす。
知りたいと思うのはおかしいことなのだろうか。
間違っているのだろうか。父さんや母さんは怒るだろうか。
俺はあれからずっと終わらない螺旋を走り続けている。
「誰かが世界に真実を投げかければ、世界は静聴してくれる。間違ってはいない。後悔することはない。世の中には、否定的な事実が溢れているけれども、不可能な夢の神話は、すべての史実より強い。」
突然、低くとても力強い、それでいてどこか垢抜けたような声が俺の背中に響いた。
「！？」
背中に投げられた声に反射的に振り向いたのだが、俺は目を丸くしてしまった。声の主の姿に面食らったのだ。
マント・・・・・違う。コートだ。確か昔のイギリスの正装、フロックコート。ボタンをかけていない為にマントのように見えたらしい。コートの下には皮のベストを着用し、細いリボンタイまで結んでいる。そして、何より一番にインパクトを受けたのは、この男の頭上に乗っている物体だった。素人目に見ても高級であるのが解るハンドメイド。光るスウェード、円筒状のクラウンに、つばの両側はビシっと剃り上がり鋭く折り返っている。
シルクハットだ。よく手品師が鳩なんかを取り出すあの帽子。妖しく黒光りしたそれは存在感を強く放ち、魔力でも宿っているかのように見える。

「知りたいと思うのは間違いではない、と言ったんだ」
まるでひとりごとのように唱えるシルクハットの男。よくよく見れば帽子だけじゃあない。この男にも大分怪しい雰囲気を感じる。日本人ではないのか、かなりの長身で、肩にかかる程の長髪は鮮やかな銀色。いかめしい顔にはグレーの瞳が鋭く光っている。少ししわが寄ってきているとはいえ、若い。三十代後半といったところか。
呆けている俺をじっと見つめたまま、なおもシルクハットの男は続けた。
「それとも、君はこのありふれたリアリティを真実として受け入れているのか」
「あ、あの・・・・・・」
あまりの突然の出来事に、思わず周りをキョロキョロと見渡すが、俺とシルクハットの男以外は誰もいない。つまり彼は俺に対して言っている、ということになる。
変質者。春になるとこういう輩が増えるとは言うけれど、まだ秋が始まったばかりだ。当然係わり合いにならないのが懸命だろう。俺はすぐに切って返した。
「あー。すいませんけど、俺急いでるんで。他の人探してくださ――」
「葉倉イツキ、推定十七歳。一流企業に勤める両親を持ち、有名私立高校に通う。全国模試で一桁に入る程に成績優秀であり、特に情報に関しては、ネットワーク関連から、プログラム、更にはシステムの構築まで、年齢にしては類稀なる学力を見せる」
シルクハットは一旦言葉を切ると、俺の目を捉え続けた。
「そして年齢が推定というのは――出生が不明だからだ」
俺は血の気がサッと引いていくのを感じた。
一体何者だ。何故。こいつは――
「君を真実と自由へ招待しよう」
「な・・・・・・」
何を意味不明な事を。頭ではそう思いながらも、何も言い返す事

ができなかった。なぜなら、この男のあまりに鋭く光った瞳の奥に、とてつもなく強固な意志と、確かに何かの断片を垣間見た気がしたのだ。それはふざけたセリフに釣り合わず、ひどく真剣で、俺を打ちつけた。

「ほらっ」

かと思えばシルクハットの男は一変して不適に笑い、俺に向けて何かを放った。

「わっ！　・・・・・・と。これって・・・・・・」

思わず受け取ってしまった物体に目を移す。

てのひらにすっぽりと収まる、百円ライターくらいの大きさ。スティック状で、ジャック部分だけは薄くなっている。

「フラッシュメモリ？」

そうだ。どこにでもある平凡なデータをやりとりするためのフラッシュメモリ。

「それは招待状。君が何者なのかを知るための、ただひとつの地図」

俺が何者なのかを知るための地図・・・・・・俺は何者なのか。何度も考えて苦しんだテーマ。いくら記憶を巡らせようが、過去の新聞記事を眺めようが、たどり着くことのできなかった真実、つまり４歳以前の俺の過去、あの事件についてということか。

「答えろ・・・・・・あんたは何を知っている？」

俺はひどく動揺していた。

「私が君に真実を告げることは、とてもたやすい。――しかし、君は自分の手でそれを解いていかなければならない」

そう言うとシルクハットの男は、身を翻し俺に背を向け歩き出す。

「お、おいっ！」

「大丈夫、君は私と共にただひとつの魂をすくい上げるのだから」

こちらを振り向きすらせず、そう言うとフロックコートをなびかせ、少しずつ、少しずつ闇へと消えてゆく。

待てよ。待て。俺は。

そうさ、今すぐあいつを引き止めて、全部喋らせればいい。そう

すればあいつが俺をからかっているだけなのか、本当に俺について何か知っているのかがはっきりする。
「待て・・・・・・よ」
でも、俺は動かなかった。違う。動けなかった。まるで金縛りにあったようにその場に凍り付いていた。
そのかわり足音だけに耳を澄ませた。
コツコツとこだまする足音に。

■■■

「ここの記述は、イエスかノー、どちらかを用意しなければならない。よってＩＦ文を用いるわけだが、注意しなければならないのは――」
スクリーンに拡大されたデスクトップを教鞭筆で指しながら、教師は言う。
学校の授業に情報という科目が組み込まれ、パソコンを用いる様になったのは、最近の事ではない。とは言っても、まだまだ歴史は浅く、全教室にパソコン完備というインフラが整っているのは、都内でも指折りの有名校と名高い我が校だけだろう。
俺は頬杖をついて、ディスプレイから目を離すと宙を眺めた
いつの時代も学校の授業というのは退屈なものなのだろう。みんなクラスという窮屈な檻に閉じ込められて、大半の人間は自分が何故学ばなければならないのかさえ解らずに、教師の話に耳を傾け、ノートを取る。それでも学校という所はとても大事なのだ。その退屈にぶら下がっているのは心地が好いものだし、みんな何者かになろうと未来へ手を伸ばす場所なのだから。だけど、
俺は自分が何者なのかを知らない。単純な意味でも、複雑な意味においても。
『君が何者なのかを知るための地図だ』
昨日のあの馬鹿げた帽子の男。一体あいつは何を知っているとい

うのだ。
　もちろん、あの男から渡されたメモリには手を付けていなかった。見ず知らずの他人から、それもどう見ても不審人物にしか見えない相手から渡されたメモリを自分のパソコンに読ませる気にはどうしてもなれなかったし、ウィルスの可能性だって充分にありえる。
　でも、何かが引っかかる。俺とあのシルクハットが知り合いという可能性・・・・・・・はない。あんなやつ会ったことも見たこともない。あんなインパクトの強い、いかめしい顔は一度会ったら忘れられそうにない。じゃあなんだろう。この釈然としない――ん？
　ふと見ると、デスクトップ右下に小さなポップアップが点滅していた。
　インスタントメッセージだ。
　一体誰が・・・・・・休み時間でもあるまいし。そもそも授業中はこのチャット機能は制限がかかっているから、使用は不可能なはず――。
　俺はそこまで思考を巡らせてから気付いた。こんなバカな事をする奴は一人しかいない。すぐさま何列か前、斜め前方の席を確認すると、赤茶頭のバカはニコニコと笑って俺にピースをしている。
　俺は教師がこちらに気付いていないのを確認してから、ポップアップをクリックした。
　別ウィンドウでメッセージが表示される。
ａｒｉｍｉｎｅ　〜はあい。イツキｗ　せんせーの権限乗っ取り成功したよｗ〜
　俺はため息まじりに、キーボードを叩いて返信する。
ｉｔｕｋｉ　〜やっぱりおまえか。ほんとに暇人だな。もっと別の事にその才能使えないのかよ〜
ａｒｉｍｕｎｅ〜もう。イツキだって人のこと言えないじゃん。毎日毎日、怪しい絵ばっかり書いて、ケーブルだらけの部屋に引きこ

もってさw　それに同じ推薦組で、期待の一年生なんだしさ、ほら、僕たち同じ穴のムジナってやつw〕

ｉｔｕｋｉ〔アリムネ、俺が描いているのは怪しくもなんともない絵だ。くだらないハックやクラックばかりしてるお前と一緒にしないでくれ。それに俺を引きこもりと言ったが、人並みのコミュニケーション能力はあるつもりだし、社会にも適応しようと努力している〕

ａｒｉｍｕｎｅ〔うんうん。優柔不断だし、決断力ないし、ちょっと根暗なとこあるし、いざって時にまるで頼りになんないし。挙句の果てに女にフラれた回数数知れず・・・・・・コミュニケーション能力があるとは、一体どの口が言うんで〕

「女にフラれるのは関係ないだろっ！」

俺は思い切り机を叩き、立ち上がってアリムネに講義した。

「い、イツキ・・・・・・ばか！」

アリムネが慌てた様子で、前方へと目配せする。

「・・・・・・葉倉。おまえがいくら女にフラれようが俺は一向に構わないのだが、おまえの言うとおり授業には関係ないな。推薦取ってる学力だけは認めるが、それが授業を妨害する言い訳にはならんぞ」

教師の厳しい口調、クラス中から突き刺さる視線、少し遅れてから、クスクスという嘲笑。メッセージウィンドウを流れる「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」の文字。

「あ・・・・・・」

時すでに遅しだ。

「ごめんよぉ、イツキー。イツキってばあ」

俺は購買のパンを口に含むと、パックの牛乳のストローに口をつ

け、流し込んだ。
「悪気はなかったんだって。だっていきなりあんな風に大声出すと思わなかったんだもの」
太陽は照りつけるが、風は冷たい。昨日とは変わって日差しが心地良い。そういえば季節はいつのまにか秋に移ったのだった。誰もいない屋上で俺はコンクリの地面にゴロンと横になった。
「誰もって、僕がいるだろ！　存在を消さないでよ！」
「うるせーな。人の心を読むなよ。裏切り者」
俺は横になったまま、言った。
「だから悪かったってば。それにあのまんま僕もしょっぴかれたら、アカウント乗っ取ったのばれちゃうからさ」
「そもそも授業中にそんなことやってるほうが悪い。裏切り者」
俺は目をつぶると、アリムネを冷たく突き放した。
「がーん・・・・・・。うっ。うう。せっかくの昼休みなのに・・・・・・ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ」
っ・・・・・・やれやれ。こんな自爆霊みたいのに憑かれてたら、おちおち昼寝もできやしない。
俺は薄目を開けて言った。
「・・・・・・飯一回な。それで手を打とう」
「ほんと？　よかったあ。まかせてよ！　チロルチョコでも、うまい棒でも、五円チョコでも何でもこい！」
「・・・・・・」
俺は再び、目を閉じるとアリムネに背を向けた。
「う、嘘だよ。冗談だってばあ！　マックくらいはおごるよお。・・・・・・だってさあ、今日のイツキってば全然元気ないから、元気づけようとだね・・・・・・」
「元気がない・・・・・・？」
俺は背を向けたまま、アリムネに言った。
「いつもと違うっていうか、なんていうか。僕だって調子狂っちゃうよ、なんかあったの？」

あのシルクハットの男が一瞬頭をよぎったが、俺はぶっきらぼうに「別に」と答えた。
そのままアリムネの方へ向き直ると、ニヤニヤと笑いながら言ってみる。
「なんだよ、心配してくれてたのか？」
「な、なんだよ悪いか！」
「いいや、さんきゅな。残念だけど何もないよ、それと俺はＢＬな展開はごめんだ」
「そ、そっか。ならいいんだけどさ。それとＢＬは僕もごめんだ・・・・・って何言わすんじゃい！」
なんだかんだで、俺が友達と呼べるのはアリムネだけなのかもしれない。中学の時も極力人付き合いを避ける傾向にあった俺に、しつこく話しかけてきたのはアリムネだけだった。
丸っこい黒目がちな大きな瞳と、ふんわり逆立った短めで赤茶の髪。それに加えていつもニコニコしていて、人懐っこい性格。こいつが俺と同じ養護施設の出身だって知った時には本当に驚いた。だってアリムネの周りにはいつも人が溢れていて、明るくて、俺とはまるで正反対で、――そうだ、こいつなら、アリムネならどうするだろうか・・・・・・。
「・・・・・・イツキ？」
アリムネは少し訝しげに、俺の顔を覗き込んでいる。
「なあ、アリムネ。おまえは知りたいか？」
アリムネは首をかしげる。
「知りたい？　あ・・・・・・もしかして本当の両親の事？」
俺は視線を地面に落としたまま、頷いた。
「・・・・・・僕は知りたくない。きっと知らなくていい事まで知る事になるだろうから。それは傷つくだろうし、後悔するよ」
やっぱり。それを聞いて何故か少し安堵する自分がいた。
「でもね」
アリムネは立ち上がって、フェンスに指を掛けると、続けた。

「知らなくても、いつか後悔するんじゃないか、とも思うよ。」
思わず俺は顔を上げて、アリムネを見た。それはいつも通りの憎らしいくらいに精緻に整った横顔だったのだけれど、やけにもの悲しく映って見えた。
「イツキは両親の事を知りたいんじゃないだろ。自分が何者なのかを知りたいだけなんだ。だったら、探してみたらいい。その上で答えを出したらいいじゃない」
少しだけ驚いた。・・・・・・話してみるべきだろうか。
「アリムネ、昨日さ――」
キーンコーンカーンコーン。
予鈴が鳴る。
「おっと。教室戻ろ。次は山田の授業だよ。遅刻したらうるさいよ」
「あ・・・・・・うん」
俺は言いかけた言葉を呑み込んだ。
アリムネの背中を見つめたまま、非常階段の扉を抜ける。
・・・・・・あまのじゃくで女たらし。そのアリムネがこんなに真剣に誠実に臭すぎる言葉で俺を諭すとは・・・・・・世も末だ。
「あまのじゃくで、女たらしでそのうえセリフが臭くて悪かったねえ！」
「お！　またしても人の心を読んだな！　このエセハッカー！　とうとう人の心をハッキングする事に成功したか？」
そうだ。アリムネの言う通りだ。探せばいい。知りたいなら手を伸ばしてみればいい。
考えてみれば、ずっと前から心は決まっていたのだから。
「イツキはたまに心の声が出てるんだよっ。ばかっ！　僕は本気で心配したのに、クサイだなんて！　そんなんだからイツキは――」
俺たちはじゃれながら心地良い檻の中へと帰還する。真実が息を潜めるこの世界で。
でも、ＢＬは断じてごめんだ。

「連休だからといって、うかれて問題を起こしたり、事件に巻き込まれたりしないように」
担任は建前で一言だけそう言うと、俺たち生徒のはやる気持ちを察してくれたのか早々に「以上解散」と言って教室を出て行った。
途端にクラスは色めき立つ。それもそのはず。明日から三連休だ。どこかへ寄って行こうだとか、食べて行こうだとか、教室はそんなムード一色だ。
だが俺はそんな連中には目もくれずに、鞄を手に取ると素早く席を立った。
「お、イツキ！　暇だったら顔出してよね」
アリムネが立ち上がって声を大にして言う。
「ああ、暇だったらな！」
顔出せというのは、俺とアリムネが最近プレイしているオンラインＦＰＳゲームの事だろう。あいつはバカみたいにゲーム好きで、これがまた異常にうまいのだ。
しかし、残念ながらこの三日間を俺はネトゲ廃人になって過ごすつもりは毛頭ない。
俺にはやらねばならぬことがあるのだ。

帰宅した俺はすぐに着替えると、ディスプレイとにらめっこを開始した。
でも今度は新聞記事でも、バカのチャットの相手でもない。
ブラシを使って何度も丁寧に線を引いていく。キャンパスには今まさに摩天楼が輪郭を帯びはじめているところだ。
絵を描いている――とはいっても俺の手に握られているのは筆でも、パレットでもない。何の変哲もないプラスチックのペン。そのペンでなぞるのはＡ４サイズのこれまた薄型のプラスチック板。向かい合っているのはディスプレイの中のキャンパスだ。
ペンタブレット。いわゆるペンタブを使ってのデジタル環境で俺は絵を描いている。

俺の父は――血のつながりはない。俺を施設から引き取ってくれた――美術館に展示される絵画のデジタル補正を生業にしているのだが、俺が小学校にあがって間もない頃、ノートに描いた落書きを目にしたとたん、目の色を変えて俺に聞いた。「絵は好きか？」と。俺は確か「たぶん」と答えたと思う。それから数日後、学校から帰った俺の部屋にタブレット一式が置いてあった。

絵の具や筆じゃなく、タブレットというのは、当事からコンピューター関係に興味を示していた俺の事を考えてのことだろう。

でも父さんは描いてみろとも、プレゼントだ、とも一言も言わなかった。父さんはいつもそうだ。母さんと違って、俺に勉強をがんばれとも、有名大学に行くべきだ、とも言わない。何も強要しないし、変な期待もしない。

とにかく、それから俺は絵を描き始めた。頭の中にぼんやりと浮かんでいるものを幾度も描いた。抽象的で不安定な絵を。絵を描いているのは楽しかった。システムの構築やプログラムの書き出しは目の前の作業をどれだけ効率よく黙々とこなしていくかという事務的な作業――無論それも嫌いではないが――なのに対して、絵を描いている時はとても暖かい気持ちになった。泣き出したいような、それでいてやんわりとした気持ち。それは年を重ねるごとに日に日に強くなっていった。

今描いているのは、これまた抽象的な空想の産物だ。

具体的に言えば、いくつもの近代的なビルが立ち並ぶ摩天楼。その足元では三輪の車やら、円形のバイクのような乗り物がホバーして移動している。極めつけは、その中央に聳え立つ直径二キロメートルはあろうかという一本の大木。

我ながらぶっ飛んでいると思う。それでも俺はこの構図が頭に浮かんだ時、何か核心に迫った気がして、描かずにはいられなかった。今まで雲を掴むようにあやふやだったものが、急に実体を見せたような、そんな不思議な感覚。

この３連休で仕上げよう。俺は前から心に決めていた。

しかし、時計に目をやると、既にぶっ通しで４時間と少し作業していることになる。ここいらで一息つくことにして、俺はリビングへ向かった。
コポコポとコーヒーメーカーが音を立てるのをぼうっと眺めながら、片付いたリビングを見渡す。父さんも母さんも一月前から出張とかで、俺はこの広い家に一人だ。
湯気をたてたマグカップを手に自室へと戻ると、机の上に放ったままの例のフラッシュメモリが視界に入った。
「・・・・・・」
俺はわざとそれを視界の隅においやると、椅子に腰を下ろし、再びペンを手に取る。
しかし。まるで作業に集中することができない。綺麗な線が引けない。一度意識してしまったからか、どうしてもメモリが気になってしまう。

『だったら、探してみたらいい。その上で答えを出したらいいじゃない』
アリムネの声が頭の中でこだまする。
俺が何者かを知るための地図。俺が探している答え。

俺は半ば無意識にメモリに手を伸ばすと――気付いた時にはパソコンに差し込んでいた。
唾を飲み込み、ディスプレイを凝視する。
が、十秒、二十秒、しばらく待っても何の反応もない。
訝しげにＨＤランプを覗き込んでみるが、やはり無反応だ。
「はは。あはは・・・・・・はは・・・・・・」
俺は一体何を期待していたのだろう。
――悔しかった。一度会ったきりの、あんな頭のおかしい奴の言った事に振り回されるなんてどうかしてる。
ほっとしたような、裏切られたような、なんとも言えない気持ち

でメモリを引き抜こうと手をかけた瞬間――。
「うわっ！」
モニターが一瞬でブラックアウトした。かと思うと、その漆黒の中に鮮やかな赤いフォントでアルファベットや、数字、記号の羅列が瞬く間に並んで行く。やがて画面を赤字が覆い尽くすと、今度は画面中央にそれは表示された。

Ｔｈｅ　ｒａｉｓｏｎ　ｄ'ｅｔｒｅ

レーゾンデートル・・・・・・味も素っ気もない字体でモニターはそれを映し出している。
確か、意味は存在理由――。
「５秒後に解析を行い、変換を開始、リンクします」
俺の思考を中断するように、唐突にその文字、自動音声は語りかける。
あれ・・・・・・。
「リンクを開始します。３、２、１――」
な、なんだよこれ。
途端に電撃が走ったように、体中の自由が奪われ、意識が重くなる。それと同時に急速に不安が音を立てて腹の中をうねり始める。やばい。これはやばい。直感的に俺の中の何かが確かにそう告げている。
「ちょっとま――」
それではごきげんよう。
自動音声がそう言うのを最後に聞いた。

モノトーンの大都市と老人の思考

ポン、ブン、カチ、そんな不思議な電子音が漂う部屋の一角。巨大な機械を操作している老人がいる。部屋の半分とまではいかないが、スペースの大半を占めるその無骨なラック群は、機械というよりも、サーバーパソコンに近いかもしれない。どうやら老人はそれを両手に握られたマウスのようなもので操っているらしい。どんなインターフェースなのか、空中にはゆうに百インチを超えるであろう巨大なホログラフィックウィンドウが浮かんでいて、その中に赤い字でアルファベットや記号がずらずらと書かれていく。老人は大きなゴーグルの下で眼を光らせて、しきりに「うーむ」「んー」などと低く唸っている。

しかし、そんな大掛かりなマシンが配置してあるにもかかわらず、全体的な部屋の造りはいささか釣り合いに欠けるようだ。

レンガで造られた壁はところどころ欠けてしまっているし、床にはめ込まれた板はまばらに剥がれているので、薄いベニヤがあてがわれている。天井でぼんやりと光る照明に至っては、傾き、金属部分は赤くさび付いていて、今にも消え入りそうだ。まるで廃屋・・・・・・簡単に言ってしまえばボロいのだ。だが、生活感は感じられる。

飲みかけのマグカップや、活けられたばかりであろう花瓶の花。散らかった机の上には、すすけた写真立てがいくつか並んでいたりと、人間の日常がそこにはあった。

「んがー！　やっぱり駄目じゃあ」

突然、我慢の限界とでも言うように老人はゴーグルを頭から引っぺがすと、乱暴に床へ放り投げた。すっかり冷めてしまった紅茶を口に含み、机に並んだいくつかの写真の中の一つを手に取る。気の強そうな目はしっかりと光が宿っているが、しわだらけのその表情

はどこか曇って見えた。頭と同様、真っ白なアゴ髭を撫でていた老人は、しばらくして思いついたように席を立つと、薄手のボロ布、まがいコートを羽織って部屋を出た。

部屋を出てすぐに、これはまた歩けばミシミシと音のしそうな木造の階段に目をやる。少しだけ何かを考えていたようだが、突然、声を大にし、2階へ怒鳴るように言った。

「おーい！　飯はどうするんじゃ？」

おそらく誰かに向けて投げたであろう質問には返事がなく、二階には人の気配は感じられない。老人もそれに気付いたのか、小言を言った。

「む、おらんのか。ったく出かけるなら出かけると言えばいいものを。ぶつぶつ・・・・・・」

ぶつくさと独り言を言いながら、手早くブーツの紐を締めなおし、老人は重い腰を上げると、頑丈そうな玄関扉を力強く開け、外へと踏み出した。

すると、そこには目を疑うような光景が広がっていた。

道を隔てて、同じようにレンガ造りの家がいくつか立ち並んでいるのだが、屋根が無い家や、爆撃でも受けたのか、半分が崩れ落ちているもの、もはや原型を留めていないレンガの塊が目に映る。道に関しても、石畳がめくれあがり、中から配管のようなものがむき出しになっていたりと、そんな景色がずっと続いている。

まるで廃村だ。

同じように老人の家の外観に関しても、他よりはマシだが、お世辞にも立派とは言えない。しかし、人工物はそんな有様なのに対して、周りに高々と並んだ木々や美しく流れる小川、小動物達は優雅に動き回り、己の存在を誇示しているかのようだ。

まるで、人間の生活だけを排除しようとしたかのような違和感。いやはや、この家の中に先ほどのコンピュータがあるとは誰も想像できないだろう。しかし、老人は蚊ほども気にせず、庭にあるこぢんまりとした花壇から、少しばかりの花を摘むと、キャタピラーの

付いた、トラクターのようなマシンに乗り込んでエンジンをかけた。
いざ動き出してみると、トラクターは思ったよりもずっと速い。どうしてキャタピラからそんなに速度が出るのかは、不明だが、まるで単気筒のようなパワーのあるトルクで、息を突く間もなく老人の家は見えなくなっていく。

進むにつれて次第に緑は消え、そのかわりに朽ち果てた木々や、干上がった川が目につくようになった。ほんの少し前まで鳴いていた小鳥や小動物の姿は、もはやどこにも見つけることができない。
そのうちに、今までポツポツと点在していた廃墟すらもぷっつりとその姿を消してしまった。
そしてそのゴーストシティは姿を表した。
どろりとした黒い靄に包まれた空、息が詰まるような油臭いイヤな匂いと重い空気。誰もいない無人の都市。
立ち並ぶ大型のビルの群れは崩れ落ち、焼け焦げ、かろうじてその形を留めているものに関しても、壁面はボロボロに風化し、いつ倒れてもおかしくない状態だ。そこら中には車のような乗り物が爆発にでも合ったかのように転がっていて、街を走っていたであろう電車は線路の途中で赤く錆付いて、時を止めている。
黒と白のモノトーンの世界。――死んでいた。全てが消滅していた。
そんな都市の一角に老人はトラクターを停めると、歩き始めた。どうやらこれ以上はトラクターでは進めないらしい。道ともいえぬ道を老人は足早に歩く。
街の様子から想像するに、科学的にかなり進んだ大規模の都市だったのだろう。それにしてもこの有様は普通ではない。戦争でもあったのだろうか。
やがて道が開けると、老人の前にとてつもない一本の巨木が姿を現した。それは樹と言うにはあまりに巨大すぎる代物で、その全長は軽く見積もっても五百メートルはくだらない。妙な威圧感すら感

じられる程だ。しかし、どうして老人はまっすぐにその巨木へと向けて歩いて行くと、ある一点で足を止め、そっと口を開いた。
「――――。」
老人が語りかけるのは、地面に突き刺された棒切れが描く十字――墓標だった。よくよく周りを見渡せば、おびただしい数の十字架が巨木を中心に並んでいる。
老人は手に持った花を墓標に添えると、祈りを捧げた。しばらくそうした後、立ち去ろうときびすを返したのだが、その瞬間、驚きに見舞われたように、その場で動きを止めた。
「う・・・・・・む」
人が、男がいた。
上背は低くもなく高くもなく、いたって平均的だ。こちら側からはうまく視認できないが、幼さの残る線の細い顔から、年のころは十代と考えられる。男にしては細い体躯で、栗色のあっさりとした茶髪の頭は斜め上へと傾き、巨木を見上げているようだった。

まぎれもなく、それは葉倉イツキだった。

老人は警戒しながらも、思考した。
一般人は滅多なことでは、《外周》には近づかない。それもこんな中心には。自分から足を踏み入れる人間は二つ。一つはあの災厄を戒めとする自分達の同士か、あるいは――。
老人はそこまで考えてから、首を横に振った。そして自分に背を向けて立つイツキの方へ歩いていく。
「《メイフィアー》は実に沢山のものを奪っていきおったが、諦めてはいかんぞ！」
老人はイツキの肩に手をかけ、力強く言った。心に傷を持つ青年を激励してやろう、くらいの気持ちで声を掛けたつもりだったのだが、
「うわあああああああっ！　妖怪じじいっ！」

予想に反して快活な返事などは返ってこなかった。
イツキは長めの前髪から覗く黒い瞳で老人をとらえたかと思うと、それを大きく見開き、叫んだ。
「な、な、なんじゃとお！　この小童が！」
難聴気味の耳にキーンと余韻を残しながらも、老人はイツキを睨みつける。
「あ、人・・・・・・？　人だ！　よかったあ」
すっかり気分を害した老人は少々いぶかしんで、聞いた。
「ったく失礼なやつじゃ。大体こんなところで何をしているんじゃ？　弔いか？　わかっていると思うが、ここは外周の中でも侵入禁止指定エリアじゃぞ。もしやつらに見つかれば変換もありえる。悪い事は言わん。さっさと引き返すことじゃ」
「外周？　弔い？　・・・・・・あ、今はそんなことはどうでもいいんですけど、とりあえず俺は――」
「ど、どうでもいいじゃとお！？　ふざけおって、あの災厄、メイフィアーを忘れたわけじゃなかろう！　一体どんな神経しておるんじゃ。最近の若者はチャラチャラして、《メトリクス》の事ばかり気にしおって！　たるんどるっ！　おのれら若者がそんなんじゃから、このレイドはどんどんと――」
いきり立った老人は急に目の色を変えて説教を始めるが、イツキは慌ててそれを制止した。
「ちょ、ちょっと待ってください！　メイフィアー？　メトリクス？　一体なんだってんだ・・・・・・」
「む・・・・・・」
慌てふためくイツキを見て、老人はしばらく考える。そして一つの答えを導き出した。（つもりだった）
「そうか！　君もメイフィアーで後遺症を持った者か・・・・・・」
老人はどこか可哀相なものでも見るみたいな眼差しでイツキを一瞥すると、しきりに何度も頷いた。
「え・・・・・・後遺症？　い、いや、そんななんじゃなくてです

ね・・・・・・」
「いいんじゃ、いいんじゃ。メイフィアーで後遺症を患った人間は決して少なくはない。差別する人間もいるが、わしは決してそんなことはせん」
「あ、いや。俺は家に帰りたいだけで・・・・・・」
「ふむ。家にじゃな。よし、わしに任せるんじゃ。送ってやろう。して、家は《カルティルか》？　その身なりであれば外周ということはないじゃろ？」
「かるている・・・・・・？　外周・・・・・・・？　あの、何を言ってるんでしょうか？」
　イツキの反応は当然と言えば当然だった。しかし老人は驚いたようにイツキの顔を覗き込むと、口を開いた。
「ま、まさかとは思うが、お主・・・・・・《オプティオン・ルーツ》については覚えているか？」
　イツキは無言で首を横に振る。続けて「メトリクスは？」「ＪＡＸＡＳについては？」他にも様々な聞きなれない単語を並べて質問されるが、やっぱりイツキは、ひとつとして答えることができなかった。
　老人は頭に手をあてて、「これは重症じゃ」と呟いた。しかしすぐに「よし、一から説明してやろう」と言って、話し始めた。
「このレイドという星は、オプティオン・ルーツと呼ばれるコンピュータエンジンが全てを管理している世界じゃ。オプティオン・ルーツはメトリクスという認証を行い、人間、街、その他諸々、あらゆる情報全てを一つのネットワークとして管理し、リンクしている。問題があれば、すぐに解析、修復を行う。ここまではよいか？」
「はは、人間とか街ね・・・・・・」
　あたりまえじゃろ？　とでも言いたげな老人だが、イツキは浮かない顔で相槌を打った。
　それもそのはず、いくらボケが始まった年寄りの、電波全開の妄想とは言え、随分と斬新な発想だ。

最近では何でも情報のデータ化が進んでいて、個人の住所録や、戸籍に至る全ての機密情報はデータ化され、国に管理されている。必要があればネットワークを通じて情報を開示することも可能だ。他にも、年末調整から税金の支払いまで、各種ＰＣで作業し、オンラインを通じて手続きのできる時代になった。まあ、それらを含めれば人間や街の管理、とは言えなくもないが、それにしても違和感を感じさせる言い方だ。第一、世界全ての情報をひとつのマシンで管理するなんて事は、常識的に考えて有り得ない。

こういう小さいところを気にしてしまうのはイツキの癖だった。

老人は続ける。

「今から十三年前、そのオプティオン・ルーツがクラッシュし、あらゆるものに悲惨な結果をもたらした。それがメイフィアーと呼ばれる大災厄じゃ。どうじゃ？　少しは思い出したかの？」

「え、えーと・・・・・・悲惨な結果をねえ・・・・・・」

イツキは思った。やっぱりこの老人の物言いには少し引っかかるところがある。

「そしてメイフィアーが起こった後、残された人々は少しずつ復興を遂げてきたが、それはほんの一部に過ぎん。手付かずになっている区域は全て《外周》と呼ばれ、現に君とわしのいるここはその一端じゃ」

老人は厳しい眼差しで、モノトーンに染まった都市を見渡した。

瞬間、イツキは固まる。

「・・・・・・は？　あのー・・・・・・・コンピュータがクラッシュしたんですよね？」

「ん？　そうじゃ。実にレイドの三分の二の人間が死んだ。残された者に関しても、君のように、記憶、あるいは言語、身体に障害を持つものも少なくはない」

「は、はあ・・・・・・」

クラッシュ。熱暴走でハードディスクが飛んだり、システムに不具合が出てうまくＯＳの起動ができないときなんかに上げられるあ

れだ。クラッシュと聞いて、もちろんイツキの頭の中ではそれらが浮かんでいたのだが・・・・・・。一昔前の時代とは異なり、ネットで複雑に繋がった現代。ある意味コンピュータは意思を持つ生命のようにもとれる。なら、人間と同様、風邪を引くこともあれば、機嫌が悪い事もある。とはいえ、それが原因で利用者が病気になったり、怪我をしたりということはありえない。しかし。イツキはめちゃくちゃに破壊された、大型の都市であったであろう光景を再確認すると、言葉を詰まらせた。

「もっとも、ここは元々《エンデバー》と言う大都市で、メイフィアーの中心地じゃったからな。特に大きな被害をこうむった。それはこの有様を見て取れるじゃろう。ここは地震の震源地みたいなもんじゃ。・・・・・・にしても、わしゃ、君はてっきりメイフィアーが起こした悲惨な結果を戒めとして、ここへやって来たと思うたんじゃが・・・・・・」

老人も同じように言葉を詰まらせ、考え始める。

「ふーむ。見たところ、カルーセルや、バギーで来たっつうわけじゃなさそうじゃな。一体どこから来たんじゃ？」

イツキは目を泳がせると、頼りなくボソボソと口を開いた。

「え、えーと、フラッシュメモリを使って？　あー、なんて言えば・・・・・」

老人は何かを勘ぐっているのか、訝しげにイツキを覗き込む。

「あ、あのですね・・・・・・」

視線に耐え切れなくなったイツキは何か言わなければ、と思うのだが、老人は頷いた。

「まあ、よかろう。どうすればいいかわからんと言っておったな。とりあえず街まで送ってやろう」

「え、でも、あの」

「歩いたら結構あるぞ。それに街へ行けば君の事を知っている人間がいるかもしれん」

「あ、あー・・・・・・」

イツキは少し考えていたみたいだが、答えはすぐに出たようだった。

オプティオン・ルーツと大災害メイフィアー

人間や街をコンピュータで管理。
オプティオン・ルーツ。
十三年前の災厄メイフィアー。
・・・・・・なんだっての？
意味不明。
イカれてる。

あのメモリを起動した後、体中に電撃が走ったような感覚にとらわれ、次第に目の前がぼんやりと暗くなっていった。気付けば例のゴーストシティで目を覚まし、ありえない光景と、この老人に出会った。
ゴトゴトと揺れるトラクターの助手席、俺は一連の流れを脳内で再生してみてから、眉を八の字にして、窓の外を眺める。
一体俺は何処にいるんだろうか、無事に家に帰れるのか、このうさんくさい老人は何者だろう、少しボケが始まっているんじゃなかろうか。というか、この老人がボケていて、俺は正常。そう思っている・・・・・・いるんだが、自信がなくなってくる。とんでもなくバカな考えだけれども、今になってここは自分の知らない世界なんじゃないかと疑い始めているのだ。それも無理はない。さっきのめちゃくちゃになった都市ひとつを見ても頷かざるを得ないのだ。沢山の、まるで見た事のない機械や、建物。確か老人はレイドと言っていたか。
そういえば――都市の中央にあった、あのでかい木、あれはまるで・・・・・・。
「で、少年。名はなんと言うんじゃ？」
「は、はいっ？」

「名前じゃ。自分の名前くらいは覚えているじゃろう？」
老人は運転に集中しているのか、こちらを見もしないで尋ねる。
「は、葉倉。葉倉イツキと言います」
なんとなく自分の名前を言うのをためらってしまう。事あるごとに質問を喰らって、モゴモゴしなければならないのを危惧しているからだ。
「ふむ。イツキ君、とりあえず今からわしらは《カルテイル》という街に向かう。君はそこで《エンコーダ》と言われる組織に自分の事を尋ねるとよいじゃろう」
「はあ、エンコーダですか・・・・・・」
なんのこっちゃ。俺はため息混じり、下を向いて前髪をいじくる。
「エンコーダってのは、プロトコルと呼ばれる法律に基づいて、行動する組織じゃ。犯罪者を取り締まったり、ハッキングや、違法なネットワークの洗い出しなどを行っておる。平たく言えばレイドの秩序を守るために存在する組織じゃ。彼らの持つ端末でイツキ君の情報を照合してもらえば、話は早いじゃろう」
俺が何もわからないからか、老人は親切に説明してくれる。まあ、説明してもらったところで、わからないのは変わりないのだけれど。
「あ、あの、おじいさん」
「わしゃ、元親ちゅう名前があるでな」
ぐっ。そんなの今聞いたよ。てか、俺が名乗ったんだから、じいさんも名乗れよな。なんて思ってしまう。でも、顔には出さない。
「あー、元親さん。元親さんは何でさっきの、エンデバーでしたっけ？　にいたんですか？　まさかあそこに住んでるなんていうんじゃ・・・・・・」
元親老人の顔が一瞬、陰ったように見えた。慌てて付け足す。
「あ、でも人にはそれぞれ事情がありますから。別に根掘り葉掘り聞こうってわけじゃ――」
「墓があるんじゃ」
「え・・・・・・？」

「わしの息子と、その嫁の墓じゃ」
「それってもしかして・・・・・・」
老人は横目で俺を確認すると、すぐ目線をフロントに戻して言った。
「メイフィアーで死んだ」
俺は思わず息を呑んだ。
おかしな老人、そのくらいにしか思っていなかったのだが、元親老人の顔はとても冗談を言ったり、ふざけているようには見えなかった。それに俺も見た。無数の十字架。あれはやっぱり墓標だったのか。
俺は黙り込んだ。元親老人も何も言わない。途端に車中を重い沈黙が支配する。手持ち無沙汰でどうにもやりきれず、窓の外に再び目をやると、さっきまでとは打って変わって木々や小川が見えた。いつの間にこんな景色に変わったのだろう。
「あれは・・・・・・」
しばらくして元親老人はポツリポツリと話し始めた。
「孫の四歳の誕生日の日じゃった。わしの息子は、さっき説明したエンコーダの部隊に所属しておってな、昇進が決まったのと、孫の誕生日をお祝いしよう、ということでみんな集まったんじゃ。しかしその最中に、メイフィアーが起こった。息子とその嫁は急に痙攣を起こし、発狂しながら死んだ」
俺は何も答えず、元親の話の続きを待つ。
「その日、世界中の人間が死んだ。人間だけではない。ほとんどの街がオプティオンのシステム下にあったからな。各地では大きな地震や爆発が起こり、街は火の海に包まれた。直接メイフィアーに干渉を受けなかった人間も二次的な災害によって命を落とす者は少なくなかった。世界はまるで――地獄絵図じゃった」
嘘だ。物理的にコンピュータが人間に干渉する？　そんなバカげた事があるわけがない、ＳＦや漫画じゃあるまいし。否定したかった。けれど、

「悲しいが、これは事実じゃ」
やっぱりこの老人が嘘を言っているようには、とても思えない。それに何度も言うようだけれど、俺はもう見てしまったのだ。完膚なきまでに破壊されつくした、あの都市の残骸を。この老人の瞳に宿る強い悲しみの色は、一緒だ。そう、あのシルクハットの男と。
「ま、君の言うとおり、わしの住処については、エンデバーと大差ないかもしれないがのう」
元親老人は一転して、ひかえめに笑った。
俺はそんな老人を見て、つい言ってしまった。
「でも・・・・・・そんな事があったっていうのに、今現在、まだ世界の管理をオプティオン・ルーツとかいうコンピュータにやらせてるっていうの？　おかしいって、それ」
真っ白な顎鬚を指で掴みながら、俺を一瞥して元親老人は言った。
「わしだっておかしいと思うわい。だが、これがレイドの在り方なんじゃ。意を唱えるものは異端者として扱われてしまう。現にわしがそうじゃな」
「ど、どういうこと？」
「おまいさんには関係のないことじゃ。ほれ！　着いたぞ」
そう言って元親はトラクターを止める。

バタンッ！　強すぎるくらいにトラクターのドアを閉めると小気味いい音が立つ。
「へえー、ここがカルテイル・・・・・・」
何だ、オプティオン・ルーツだ、何だという割には・・・・・・・・といった雰囲気。少しだけがっかりしてしまった。さっきの《エンデバー》を見てしまったからか、もっと近未来的な建造物がガンガン立ち並ぶ摩天楼を想像していたのだ。とは言っても、それらがまったく無いわけではない。見た事のない形状の建物も部分部分に屹立している。それでも、木造の家屋の方が絶対数が多く目を引くために、どこか古臭く感じるのだ。そしてエンデバーと同じように、

街の中心にはなぜか一本の巨木が聳え立っていた。
過去の中世の田舎町と未来の建造物が混同するような不思議な町並みは、俺の目にはやけに新鮮で斬新に映った。
元親老人はもう一度俺に「自分の家がわかるか？」と聞き、もう一度俺は首を横に振った。エンコーダとやらの駐在所までの道順を教えてもらい、そこで自分の所在を確認するように言われた。「まず最初に後遺症の事を伝えろ、聞かれたこと以外は一切喋るな」とのことだ。俺はよくわからなかったけれど、とりあえず頷いた。
「ま、そのうちここがどんなところか、嫌でも思い出すようになる。それじゃあな、イツキ君」
そう言うと元親老人は踵を返し、のそのそと歩いて行ってしまった。俺は元親老人の背中に軽く会釈をして、空を仰ぐ。
「変なじいさん・・・・・・」
空は透き通るように青かった。

＊＊＊

広大な赤い石畳の道、人々は所狭しと行き交っていて、至る所で大中小、様々な露天商店が開かれている。何に使うのか不明なキラキラ輝く美しい石や、いびつな茶色い泥の塊のようなものが売られていたりと、見慣れないものが沢山だ。そして石畳の道に沿って建ち並ぶアパートメントやビアロリポップ、カフェ。それぞれの窓からは、実に手の行き届いた花々が垂れ下がっている。往来する人の中には、キャタピラのついたスケートボードのようなものに乗っている人や、バイクとは少し違う変なものにまたがっている人もいる。
散々っぱら、近未来的な都市を想像していたとか、中世の田舎町とか言っておいてなんだが、実際にこのカルテイルとやらを目にして、俺の中で元親老人の話の信憑性がさらにグンと上がってしまったのは認めざるを得ない。だってこんなハウステンボスや、ディズニーランドみたいな、いいや、それよりももっと不思議な世界に住

んでいる人間が本当にいるのだから。
俺は珍しいものだらけの街を少しだけ散歩することにした。元親老人に言われた通り、エンコーダとか言う人のところへ行ってもよかったのだけれど、それをしたところで何も解決しないというのはなんとなく予想がついてしまっていたし、ここが何処なのかとか、どうやって帰ろうとか、そういった事を考えるのが急に面倒になってしまったのだ。かと言って漫画やゲームのように、これは夢だ！
なんて割り切る事は俺にはできそうにない。だって確かにこの現実は自分の目を通して、リアルとしてそこに実在してしまっているのだから。
ええい、ままよ。なるようになる、と。ほんのひと時の思考停止を俺は決め込んだ。

しばらくぶらぶらと歩いていると、ひとつの建物の前で人だかりができているのを見つけた。
何かのお店らしいのだが、人垣に阻まれてよく見えない。
「よっこらせっと」
例に倣って大衆に紛れ、中を覗き見ようと、爪先立ちで背伸びをした時だった。
「それでは皆様、席が空きましたので、ご案内させていただきます」
くすぐったいようなアニメ声が聞こえたかと思うと、人々は先導され店内へと消えていく。急に開けてしまったスペースで、俺がボケッと突っ立っていると、どこかで聞いたようなセリフが耳を付いた。
「おかえりなさいませ、ご主人様」
「！？」
「こちらへどうぞ」
「え？　ええ？　ちょ、ちょっと！」
いきなり俺の手を握った女性・・・・・・極端にスカートの短い黒を基調としたワンピース。その上にはフリルのついた白いエプロ

ン、極めつけは頭に乗るレースのカチューシャ。まるでメイドさんのような・・・・・・ていうかメイドだ。
「お決まりの頃、御呼びください」
「あ、はい」
気付けば、流されるまま、手をひかれ、席に座らされてしまっていた。
「・・・・・・」
色々思うところはあったけれど、とりあえず不審人物にならないよう、目だけを動かして辺りを見回してみる。
大きな木目のついたウッド調の壁、そこかしこに置かれた間接照明が照らす柔らかな優しいオレンジの光。座っているソファは柔軟だが、程よい弾力がある。空調管理がしっかりとなされているようで、空気が潤っているのを感じる。どうやら二階席もあるらしく、店内の両脇には湾曲した階段が伸びていて、まるで金持ちのお屋敷のロビーのようなつくりだ。複数のメイドが忙しく動き回っているが、例外なくみんなかわいいし、スタイルもいい。だからと言って男性客ばかりというわけでもなく、女性客もかなりの数がいるみたいだった。
「・・・・・・しゃれおつ」
こんな感じだったらアリムネと来てもいいなあ、なんて考える。あいつは暇があれば「メイド喫茶行こう」ばかり言ってたから。もちろん断り続けてるんだけれど。
「《ロリポップ》へようこそ。御主人様、お決まりですか？」
駆け寄ってきたメイドは、百パーセントスマイルで俺に語りかける。
「あはは。あ、お勧めってなんですか？」
いかんせん「御主人様」は俺にはくすぐったい。
「アムール・ラグが本日のランチになっております。食後にはパナッソの葉を挽いた紅茶はいかがですか？　セットにすることも可能です」

てきぱきとメイドはそう答えながら、テーブルを手でなぞったり、軽く叩いたかと思うと、いきなり俺の目の前にホログラムが出現した。驚きながらも立体の映像に目をやると、それは皿に盛り付けられた見事な料理と、湯気を立てるカップだった。なるほど。

「じゃあ、これください」

俺はホログラムを指差して言った。

「ありがとうございます。ではお支払いを。カラーメトリクスをよろしいでしょうか」

・・・・・・？

ここでようやく気付いた。なんとなく流れにまかせて、ここまで来てしまったが、そもそもここは俺のよく知った世界のファミレスではないのだ。

カラーメトリクス・・・・・・そういえば元親老人が何か言ってた気がする。

「あのー・・・・・・千円札とか使え・・・・・・ませんよね」

苦し紛れで吐いたセリフに対して、予想通りメイドはくぐもった表情で俺をじっと見つめる。そして、突然何かを思い出したように言った。

「メトリクスが配布されていないのですか？　・・・・・・まさか、反逆者・・・・・・潔白の白（ビアンコ）！？」

瞬間、大勢の視線が俺に注がれる。もちろん俺には何も理解できちゃいない。ただなんとなく、あんまりいい状況ではないらしいが。

「ビ、ビアンコだか、ブランコだかよくわかりませんけどね、反逆って、そんな大げさな。何も食い逃げしようなんて思っちゃいませんよ・・・・・・おとなしく帰りま・・・・・・うわっ」

そう言って席を立ちかけた最中、どうしたのかメイドは無理矢理俺の手を掴んで引っ張ると、腕に装着された薄型のタブレット端末に乱暴に触れさせた。

その瞬間。

「いっ！？」

空襲、大火事、避難訓練？　タブレットに俺の手が触れた瞬間に、甲高いサイレンのような音が大音量で鳴り響く。こちらに注意を注いでいた大勢の人々が、その音を聞いた瞬間に、一斉に顔色を変えた。

きっと自分のせいでこの騒々しい音が鳴り響いたに違いない。なんとなく状況を理解したつもりで、俺は肩を竦めると下を向いた。咎められる覚悟はできていたのだが・・・・・・。しかし、五秒、十秒、いくら待っても怒声はおろか、囁き声すら聞こえない。恐る恐る顔を上げると、そこにはメイドの蒼白した顔があった。

「申し訳ございません、ご無礼をお許しください！」

俺は突然の事にぽかんと口を開けてしまった。

「まさか絶対の黒（ネロ）の方だとは・・・・・・どんな処罰も受けますので、変換だけは・・・・・・」

そう言うメイドは正座して、額を地面に擦り付ける。土下座というやつだ。

「ちょ、ちょっと！　何やってるんですか、起きてくださいよ」

俺は慌ててメイドの肩に手をかけると、起こしにかかる。これじゃあまるで、俺が悪者みたいじゃないか。

「お許しいただけるのですか？」

目に涙をいっぱいに溜めて、捨てられた子猫のような瞳でこちらを見るその顔を前に、何だか罪悪感を感じてしまう。俺は頭を掻きながら、眉を八の字にして言った。

「よくわかんないけど、もういいからさ」

それを聞いたメイドは安堵の表情を浮かべると、深々と頭を下げ、俺に何度も俺に礼を言い、駆け足で厨房へと向かっていった。

「マジかよ、絶対の黒（ネロ）だってさ」

「なんでこんなところに？」

「いつもの金色（オーロ）の連れかな」

「僕だってこないだ昇進してベルデになったっていうのに、あんな

若いのが？」
「ばかっ、騒ぐなよ。聞かれたら事だぞ」
「そうだよ、変換なんてごめんだぞ、俺は」

静かにどよめく店内、ひそひそと交わされる会話。聞き取れないが、俺のことを噂しているに違いない。だけど当事者である俺はまるでピンと来ない。状況から感じる事ができるのは、何かの間違いで自分がＶＩＰ待遇になっているということと、突き刺さる無数の視線に気が引けるということだけ。まあ、とりあえずお金の心配はしなくてもよさそうだ。

もちろん疑問は尽きない。それでも料理が運ばれて来てしまえば、それを食べるのに夢中になっていた。

「う・・・・・・うまい！」

なるほど。これだけ繁盛しているのも頷ける。運ばれてきたアムール・ラグなる料理は、簡単に言ってしまえばオムライスのようなものだった。黄金の照りを放つ半熟の卵を崩すと、そこにはほのかに香ばしい香りが漂う。赤いソースで絡められた肉と細かく刻まれた野菜、ほんのり苦味を与える香辛料、パラっとした口当たりの程良いライス。冗談じゃなくうますぎるのだ。当然忙しくスプーンは皿と口を往復する。あっという間に平らげてしまうと、見計らったように、ポットとカップが運ばれて来た。

「ふう・・・・・・」

不思議な匂いのする紅茶を口に含みながら、幸せの余韻に浸る。

すると突然それは始まったのだった。

変換作業と勝気な女の子

バコンッ！

大きい音に俺は反射的に振り向いた。

見ればやたらと背のでかい大男が、ドアを蹴飛ばして入ってきたらしい。大男は品定めでもするみたいに店内を注意深く観察していた。

「お、いたなバグメガネ。てめえウィルスまみれのくせに、こんなところで堂々と飯食ってるんじゃねえ！」

大男はある一点で視線を止めると、ひどいしゃがれ声で、汚い怒声を吐きながら、そこへ向かって大股で歩いて行く。

「え、エキューさん。な、なんの事でしょう？　そんなバグだなんて、きっと何かの間違いです・・・・・・」

大男の視線の先では、気の弱そうな太った男性が目を泳がせている。丸いメガネにキノコカットの黒髪。いかにも、といったやられ役。

「とぼけてんじゃねえ、知ってるんだぜ。収容所から逃げ出した変換済みの壊れちまった年寄りの残屑者（残屑者ー）を、てめえが外周で世話してる事はよ！」

エキューと呼ばれた大男はそう言ってメガネ君の胸倉を掴むと、もう一方の手で思い切り腹を殴った。鈍い音が響くと、メガネ君は短い悲鳴を上げ、床に倒れこむ。

「な、なんで・・・・・・・あのおばあさんは何も悪い事はして・・・・・・ない」

大男を見上げて、メガネ君は弱々しく言った。

「へっ。今更何を言っている。このレイドではＪＡＸＡＳのプロトコルが絶対だ。背いた奴は反逆者（ンコ）、変換の対象だ。そして・・・・・・反逆者（ンコ）の手助けをしたら、そいつも反逆者（ンコ）。そんな事は暗黙の了

解だろッ！」
今度は倒れたままのメガネ君を蹴り上げた。蹴りは見事にみぞおちにヒットし、メガネ君は苦しそうに嗚咽を漏らす。
俺は思わず顔をしかめた。やりすぎだ。あの大男正気の沙汰じゃない。お店に入ってくるや否や、いきなりお客に暴行を加えるなんて。つまみ出されるのは目に見えている。
しかし、いくら待ってもつまみ出されるどころか、止める人は誰一人としていなかった。不思議に思った俺は店内を見渡して、遅まきながら異常な事態に気付いた。
誰もが何も起きていない、目に入っていない、とでも言うように、それぞれが食事を取り、会話をしている。メイドは――同じだ。まるでそれぞれが与えられた役割をこなしているみたいに、まるで日常のロリポップのワンシーンを演出しているみたいに感じる。言うなればエキストラ。でも――そんな不自然な人々の表情にはどこか陰った部分がある。やっぱり。見えていないわけじゃない。――みんな関らないようにしているのだ。なるべくあの現場から目を逸らし、あくまで気付かないフリをしているのだ。
その間もずっと、メガネ君は暴行を受けている。あの一部分だけ見えないエアポケットに守られたみたいに、時を進めている。
「おい、どうすんだよ。あのババア始末すんのか、しねえのか、はっきりしろよ！」
「おええええっ」
とうとうメガネ君は嘔吐した。大男の顔が醜く歪む。ゴミでも見るみたいな目つきで、「きたねえ」そう言うとブーツでメガネ君の顔を踏みつけ、唾を吐きかけた。
「ぼ、僕にはでき・・・・・・ない・・・・・・です」
足蹴にされ、唾を吐きかけられ、自分の吐瀉物にまみれながらも、メガネ君は必死に抗った。割れて床に散らばった食器の破片で腕は赤く染まっている。
「野郎ッ・・・・・・！」

ふいに俺は今までに感じた事のない、強い怒りを覚えた。
・・・・・・それでも考えてしまう。
自分が出て行って何ができる。あの体格差じゃ、返り討ちに合うのは目に見えているだろう。
何を柄にもない事をしてる？　その握りこんだ拳をどうするつもりだ？
面倒な事は避けて通ろうぜ。
安い偽善は捨ててしまえ――。
「くっ・・・・・・」
俺は拳を握りこんだまま、歯を食いしばって下を向いた。
その時。

「君ねえ、いい加減にしなよ！　ウィルスだバグだって、ごちゃごちゃごちゃごちゃうるさいっつうの！　あたしから見れば、君のほうがよっぽどカスよ。もうね、レジストリに溜まったゴミ以下！」
俯いていた俺は驚いて再び振り返り、その声の主を探して忙しく瞳を泳がせる。
いた――。
ちょうど大男が、がなり立てる席の真後ろ。
肩まで伸びる、アッシュがかったボブカット。細く折れそうな華奢な肩、そこから続くタイトなジャケットに浮き出る控えめの胸と、細いウエストから腰にかけてのライン。大胆なショートパンツから覗く太股は透き通るように白く健康的で、ブーツまで美しい曲線を描いている。形の良い卵型の顔には、小さく通った鼻と、つり上がった眉が、長いまつ毛の大きな瞳は、発せられたセリフからもわかるように、まるで気の強さを示唆しているかのようだ。一言で言ってしまうと、
「か、かわいい。普通に・・・・・・」
俺は見とれてしまった。
もちろん彼女は俺の勝手な感想や、葛藤なんて知る由もない。だ

が彼女は俺にできない事をいとも簡単にやってのけたのだ。
思い切り両の手の平をテーブルに叩きつけて立ち上がると、小さな鼻をフン、と鳴らしてみせる。途端に今までシーン1を演じ続けていた人達の動きが止まった。まるでカチンコで、はいカットー！
とでも入ったみたいに。
「な、な、なんだと。俺は金色（オーロ）だぞ？　誰に口利いてるのかわかってんだろうなあ？」
大男は鼻の穴を広げると、ようやく反応した。
「うん。カ・ス」
間髪入れずに、飛び切りの笑顔で、語尾にハートマークでも付けたみたいに彼女は言う。
「て、て、て、てめえ！」
「うそうそ。言い方が悪かったね。君の事はよく知ってる。金色（オーロ）メトリクスのくせして、こんな庶民的な店に来ては、一般人に権力振りかざして優越感に浸ってる、歪んだ人格破綻者だってこと。しかも金色（オーロ）っていうのも、親がペコペコＪＡＸＡＳに媚売ってる賜物で、要はただの七光り。つまり君は何も持たないゴミ。腐ったミカンってとこかしら。どう？　大体合ってるでしょう？」
肩までの髪の毛をサラリと掻きあげて、口元を緩め、小馬鹿にしたように彼女は鼻で笑う。
「てっ・・・・・・てめえ、ぶっ殺す！」
すでに一触即発の状態だった大男は、血管が浮き出る程に顔を赤くして、丸太のような腕を振りかぶると、素早く彼女に殴りかかった。
「おらあっ！　・・・・・・って、あれっ？」
しかし、彼女は涼しい顔をして、ひょいと半歩移動すると、大男の拳をあっさりとかわして見せた。当然大男の拳は行き場をなくし、大きくバランスを崩す。そして、
「あああああああああああああああ！　た、タマあ！」
飼い猫の名前を叫んだ。っていうのは間違いで、股を押さえて前

のめりに倒れた。
　そりゃそうだ。彼女はバランスを崩した大男の後ろから、思い切り股間を蹴り上げたのだから。同じ男ながら思わず「いたたた」と言いたくなる。当然ながら、大事なところを蹴られた大男は、うめき声を上げ、床でのたうちまわった。
　その瞬間、さっきまでまるでこちらに注意を払わなかった人々から、蓋を切ったように次々にざわめきが起こった。
「フン」
　彼女は腕を組んで仁王立ち。勝ち誇ったように見下すその様は、ある種、絶対的で威厳すら感じさせる程だ。
「て・・・・・・てめえ・・・・・・許さねえぞ」
　大男はＰＤＡのような小型の機器を取り出し、手早くタップすると続けた。
「もう遅いぞ、今シグナル送ったからな。てめえは変換された後ジェイル行きだよっ、はははははは――ぶへえっ！」
　床に転がったまま、股を押さえ笑う怪しすぎる大男は、再度彼女に蹴られる。今度は顔を。ヤクザキックで。
「金色（オーロ）メトリクスが何？　エンコーダが何？　ＪＡＸＡＳが何？　無茶苦茶なプロトコルを並べて、従わない人は散々痛めつけて、最後は変換。君は間違ってると思った事はないの？　その人のしている事のどこがいけないっていうの？　一人じゃ生活できないお年寄りの面倒を見ているだけじゃない！」
「だ、だからそれがプロトコルに違反するって――」
「それが間違ってるって言ってるのよっ！」
　大の男をものともしない、その物言い。彼女は大きなつり目で大男を睨んでいきり立つ。
　ものすごい女の子がいるものだ。俺も、他のお客も呆気に取られて、アホの子みたいに口を開けたまま、一部始終を眺めることしかできなかった。
　そんな誰もが沈黙を守る中、

「お、おい、外見ろ、外！　エンコーダのバギーが来たぞ！」
「ほ、本当だ。早すぎる。やばい、巻き添え喰らう前にさっさと逃げなきゃ！」
「絶対の黒（ネロ）もいるんだ、何を告げ口されるか、わかったもんじゃねえ、バグ扱いされるぞ！」
窓際の数名の客が急に騒ぎ始めた。
どよめく民衆の中、俺も同じように窓の外を見やると、確かにゴツイ戦車みたいなものが止まっている。さっきまではそんなものはなかったはずだ。元親老人が運転していたものと同じ類のものだろうか。
それにしても、先ほどから飛び交うエンコーダと言う言葉。元親老人の話を聞いた時から思っていたのだが、やっぱりファイル形式の変換なんかに使われるアレしか思い浮かばないのだが・・・・・・。
急に騒ぎ出したお客達は、あからさまに慌てはじめ、次々に席を立とうとする。ほぼそれと同時、
「静かにしろ！　動くんじゃない、席に座れ！」
一人の男が威勢のいい声を響かせて、ズカズカと店内に入ってきた。
そのいでたちはまるで――軍人。俺とアリムネがよくプレイするＦＰＳゲームなんかにも出てくるが、全身にはアーバンスーツを着込み、上半身にはチェストリグ。腹回りにゴツゴツと配置されたポケットには沢山の手榴弾や、銃が装備されているに違いない。足元は見るからにゴツいコンバットブーツ。もちろんスーツの裾はブーツインされている。そのままサバゲーに参加できそうなこの男が、おそらく噂のエンコーダというやつなのだろう。しかし、俺にはひとつ気にかかることがあった。見かけはまるっきりの軍人一色なのだが、メインの火力となる装備がないのだ。普通なら、兵士たるもの自動小銃のひとつくらいを持っているものだが・・・・・・。
席を立とうとしていた連中は、そんな彼の姿を目にした途端に力

なくその場に直る。
「ふむ。緊急のシグナルを受け取ったので、来てみれば、まったく」
頭部を覆っていたフルフェイスのようなものを取り外すと、彼は諍いのあった現場を品定めでもするみたいに見渡す。鋭い切れ長の一重瞼に、カッチリと切りそろえられたクルーカット。いかにも厳しい訓練を受けてきた、という風に見て取れる。
「随分とお早い到着だこと」
彼女は小さな声でそういうと不機嫌そうに拳を握り締める。こんな勝気で、敵なしと思われる彼女でも苦手とする相手なんだろうか。
「まさかこんなに早く来ていただけるなんて！」
大男は立ち上がると、股間を押さえたまま、エンコーダに近寄った。
「ふ、ふむ。たまたまこの近くで不正なメトリクスを検知したのでな・・・・・・してどうしたと言うのだ？」
すかさず大男は彼女を指差すと言った。
「俺はバグをＪＡＸＡＳに連れて行こうとしていたんです、そしたらこの女がしゃしゃり出てきやがってですね――」
「ふむ。バグか。どこにバグがいるのだ？」
「え・・・・・・あ、こいつです！　このメガネです！」
指差す方向を変えて、床で呆けているメガネ君を指す。
怯えるメガネ君を舐めるように見ると、落ち着いてエンコーダは大男に尋ねた。
「彼はどんな反逆を？」
「こいつ残屑者（残屑者ー）をかくまって外周で世話してやがるんですよ、証拠は掴めてます、場所も――」
必死で説明する大男を見て俺は思う。元親老人の話によれば、エンコーダってのは犯罪の取り締まりや、法律に背いた連中を裁く組織だったはず。あっちで言う警察みたいなものだろう。事情は詳しく知らないが、傍からどう見たって悪人はおまえだ。せいぜい絞られるがいいさ、と。

「ふむ。残屑者の隠匿は重罪だ。世話をするなぞもっての他。あいわかった。早急に変換に入ろう」
機械的にそう言うと、エンコーダは首を左右に振ってコキコキと骨を鳴らし、スーツ左腕に埋め込まれた、液晶をタップし始めた。
待て。・・・・・・待て待て待て！　重罪ってどういうことだ、ろくに事情も聞いてないじゃないか、よく見ろ、どう見ても悪いのはその大男だ、そいつは無抵抗の相手にさんざん暴力を振るった挙句、唾まで吐きかけたんだ。
頭の中で納得できない疑問が渦巻いていた。
「個人ネットワークからの介入を試みる。目標確認」
エンコーダの低い声が静かに店内に響く。
――耳鳴りがする。いや、耳鳴りじゃない。ノイズのようなものだ。無線のヘルツを探っている時の、あの耳障りな音によく似ている。何故だか俺の中で嫌な予感がぷくぷくと膨らみ始めていた。
「あ、あ、あ」
恐怖におののいて動けないのか、メガネ君は床に尻をついて、あんぐりと口を開けたまま後ずさりするが、
「直接進行準備よしッ！」
「いやだ・・・・・・。いやだいやだいやだあっ！　やめてよお！」
急に声を張り上げたエンコーダを合図とするみたいに、メガネ君は赤ん坊のようにハイハイの状態で発狂しながら、逃げ出そうと床を必死にはいつくばる。しかし腰を抜かしていて、距離は稼げない、開かない。
次第にノイズは金切り声のような異音を立て始める。もうこれ以上高い音は出せない、苦しいとでも言うみたいに。
「や、やめて！　わかった、わかりました！　あのおばあちゃんの場所教えますから、もうしませんから、だずげてぐだざいよぉ！」
頂点に達しようとしているのか、割けるような音の中、エンコーダは冷たい目でメガネ君を一瞥すると、指を指し、叫んだ。
「サブミット！」

っ！？
轟音だった。まるでチェーンソーで金属を切りつけたような、巨人が世界中の木を一度になぎ倒したような異常な爆音。それに伴って、すさまじいまでの爆風と熱。さっきまでの細いノイズは前ぶれだったのだ。溜め込んだものを吐き出すまでの前ぶれ。
その轟きと爆風の中で、俺は確かに見た。エンコーダと言われるそいつの腕から無数の光、まがいフォトンレーザーのようなものがメガネ君に向けて飛んでいくのを。
「がああああーーーー！　ぎぃぎぃぎぃぎぃ！」
光が突き刺さるのと同時、奇声と呼ぶのも違う、「音」を出しながらメガネ君は体をよじらせる。全身に痙攣が起きているのか、床に突っ伏したまま、長い間苦しそうにさんざん暴れた後、今度はピクリとも動かなくなった。その代わりに、
「あぁぁぁー。うぅあぁー」
声にならない声を上げ、眼球はうつろで、視点が定まらず、口からは唾液を垂れ流す。あきらかに異常だ。まるで、死神が巨大な鎌で、魂だけを切りとって行ってしまったかのごとく。
それでも、それでも生きている。確かにレーザーのようなもので狙い撃ちされたのに。一体何をされたというのだ。あんな兵器は見た事も聞いた事もない。メインの装備を持っていなかったんじゃない。俺が気付かなかっただけなのだ。
今、目の前で起こった異常な事態を目の当たりにして、俺はようやくここが《レイド》という別世界なのだと確信した。
「へっ。残屑者をかくまったりするから、こういう目に合うんだよ。反省しな、ってもうできないかあ。おまえも仲間入りだもんなあ？
よし、その調子でもう一人のバグ女も・・・・・・・あれ？　・・・・・・・・・・・・・・・い、いねえ！？」
大男の気付かぬ間に、というか誰もが気付かぬ内に忽然と彼女は姿を消していた。俺も店内を見回してみるが、やはり彼女の姿はどこにも見当たらない。

「あのクソアマ、逃げやがったな！　タマ蹴るだけ蹴って逃げやがったあ！　くそったれっ！」
大男は乱暴に近くのテーブルを蹴り上げて、肩をわななかせる。
「心配しなくていい。追跡して確実に変換しておこう。今から私はあの女の後を追う。君の今回の正しい行いには感謝するぞ」
エンコーダはそう言うと、素早く店を出て行った。
正しい行いに感謝する？　何を言ってるんだ、何かおかしいんじゃないか？　変換ってさっきのあのレーザーの事だろうか。もはや自分の常識では推し量る事のできない現実が脳内をぐるぐると廻る。あまりに突然に色々な事が起きたせいか、脳みそに血が足りない。パンク寸前だ。

大男がさんざっぱら周りに当り散らしてから、エンコーダに次いで店を後にすると、店内の雰囲気は少しだけ弛緩し、落ち着きを取り戻したようだ。
俺はもう一度メガネ君を見やる。やはり唾液を垂らしたまま、どこを見ているのか、焦点は定まっていないようだ。目に光は宿っていない。
そっと周りに聞き耳を立ててみる。
「残屑者の世話なんかしているからさ」
「ああなったらおしまいだな」
「やだね。こわーい」
「プロトコルに背いてはいけないんだ。いいか、絶対に潔白の反逆者に関ってはいけないよ、おまえたち！」
「はーい！」
エンコーダは犯罪者を取り締まる？　何か間違ってるんじゃないのか、あのじいさん・・・・・・。
混乱しながら、俺はそっと立ち上がった。
「わ！　あ、どうも。わ、私たちはプロトコルを忠実に守っていますから」

「そ、そうです。さっきのようなバグは変換されて当然です」
隣のテーブルに座っていた二人は俺と目が合うと、そう言った。自分の父親と同じくらいの年齢だろうか。二人の顔を見ると、無性に腹立たしさを感じた。他にも思う事は沢山あった。だけど、二人には何も言わず、口をまっすぐに結ぶと出口へと向かう。
俺には何も言う事も、思う事もできない。
俺だって彼らと同じだ。見ているだけだった。
あんな女の子でさえ、立ち向かって行ったっていうのに。

「先ほどは本当に失礼致しました、数々のご無礼をお許しください。行ってらっしゃいませ！」
店を出ようとすると、さっきのメイドが駆け寄って来て、深く頭を下げて言った。
「あ、あの・・・・・・」
「は、はいっ？」
俺は店内の方に視線をやって、何気なくメイドに尋ねてみる。
「さっきお店の中で撃たれた人は今後どうなっちゃうの？」
「撃たれた・・・・・・？　あ、はい。ご存知だとは思いますが、変換されてしまった人間は精神、頭脳に障害をきたし残屑者と言われる廃人となります。その後ＪＡＸＡＳの施設へ収容される事になるのですが、ごくまれに一部の残屑者は外周へ出てしまい、潔白の反逆者達の根城レイジストリートで生活していると噂されていますが、私にも詳しくは・・・・・・」
「あ、ありがとう。もう充分だ」
「お役に立てずに申し訳ありません・・・・・・」
「いや、ごちそうさま」
いつまでも頭を下げているメイドに申し訳なくなって、歩き出す。
ＪＡＸＡＳ、オプティオン・ルーツ、カラーメトリクス、残屑者、エンコーダ、反逆者。なんとなく点と点が線でつながり始めた気がした。それでもわからない事だらけだけど。

やっぱり自分の知っている世界ではない、かと言ってゲームなんかじゃない。
まぎれもなくこれは――。
「現実・・・・・・」
どうしたって認めるしかない。
俺は賑やかな大通りを見渡して、ため息をつくと、紅の石畳へ踏み出した。

世界の乗っ取り（マウント）

「クローズ。あと一本張るよ」
理解した。どうにもこういうことだけは理解が早い。頭が回る。
「げっ・・・・・・これ以上張るっていうのかい？　勘弁しておくれよ」
「どうする？　そっちは張るの、それとも下りるの？」
「く、くそっ。もちろん張るとも！」
「そうこなくっちゃね」
ニヤニヤと笑う俺は、誰の目にもいつもよりずっと頼もしく映るだろう。
「よし、んじゃあ、ファインドッ！」
「ファインドっ！」
空中に表示されたホログラフィックのカードがめくれると同時、大きな歓声が俺を包む。
《プリーツファインド》それがこのカードゲームの名称らしい。カードと言っても、ホログラフィックで表示されたカードを使って行うのだ。賭け事らしいのだが、ビギナーズラックも手伝ってか、俺は連勝し続けていた。
先程のメイド喫茶兼ロリポップで何の間違いか、自分がＶＩＰ待遇として扱われたのを思い出した俺は、おそるおそる露天で買い物をしてみた。すると予想した通り、俺が魔法の手をタブレットにかざすと、商人はみんながみんな水戸光圀にするみたいにへへーっと平伏するばかりで俺は確信した。
これは――やりたい放題だ・・・・・・！
続けて、昼間から桃色のネオンがぴかぴかと光る怪しげな裏通り――ポーンストリートと言うステキなところ――に迷い込んだ俺は――（あくまで自発的に入ったわけではない。断じて、たぶん）すぐさま良い匂いのするお姉さんに話しかけられ、手を引かれ、店内へ。

ベッドに寝かされ、ドキドキしていたら、ゴツイ男の人が出てきてマッサージしてくださった。俺が心なしか不服そうな顔をしていたら、すごく怖い顔で「なにか？」って言われたので、慌てて首を横に振った。それでもやっぱり俺がタブレットに手をかざしたら、青ざめた顔をして態度を変えたので、ちょっと良い気味だと思った。

後で聞いたところによると、俺が入った店はどうやらソフトなもので、中には本当に大人の男になれるお店もあるらしい。ま、今回俺は純潔を守ったってこと。・・・・・ちょっと残念な気もしないでもないけど。

帰り際、俺をマッサージしてくれたスキンヘッドのゴツイおじさんが、ペコペコしながら、このカジノの招待状をくれた。そして今に至るというわけだ。

「おっと、まただ。悪いね！」

「ぐぐぐ・・・・・っくしょう！　十五セット連続かよ。おたく強いねえ、持ってけドロボー」

対戦相手の筋肉質で爽やかな男が、ホロウィンドウを展開させ、ペイのボタンをタップしようとしたところで俺は言った。

「あ、いいよ、いいよ。なんか俺、招待状もらったから、かなりタダで遊べるみたいだしさ」

「・・・・・・え？　何言ってるんだよ、勝負は勝負だ。遠慮するなよ。さ、メトリクスを提示してくれ」

大負けしているであろうに、筋肉質の男はニカっと笑って言う。

「あー・・・・・・ほら、俺さ、メイフィアーの後遺症で、あんまり記憶が無いらしい。だから、メトリクス持ってても価値がよくわからないし、意味が無いと思うから」

俺が端末に手をかざしてしまえば、きっとこの男も態度を変えるだろう。なんとなく、俺はそれが嫌だった。

「そ、そうか・・・・・・メイフィアーで記憶が？　それは大変だったな」

本当に残念そうな顔をして視線を落とすと、筋肉質の男は続けた。

「ちっ、メイフィアーや、エンコーダ。ＪＡＸＡＳは何もかもを俺達から奪っていきやがる」
あ、そうか。
筋肉質の男の口ぶりに驚きながらも、俺は元親老人の話を思い出していた。あの話が本当なのだとしたら、色んなモノを失くしたのは、何も元親老人だけではないのだ。
「まあ、それでも何にもなしにチャラってのはこっちも気分が良くねえ。ちょっと一杯やんねえか？　もちろん俺がおごる！」
そう言って親指で後ろを指差す筋肉質の男。その先には小さなカウンターバー。
悪い人ではなさそうだし、レイドの事をよく教えてもらえれば、元の世界に帰るヒントが得られるかもしれない。「オーケー」俺は頷いた。

「へえ、それで気がついたらエンデバーで目を覚まして、一切合切、何にも覚えちゃいねえってわけか。イツキよお？」
「うん。そんなとこ。まるっきり忘れてるみたいだから、変な事聞くかもしれないけど、大目に見てよね」
筋肉質の男の名はヨリカネ。メイフィアー後の復興作業を生業にしている、見た目通りのガテン系のアツイ男だ。なんでもこのカルテイルの大型ビルの建設には今まで全て立ち会っているそうだ。白髪に近い金色の短い角刈りと、太い首、盛り上がった胸板。笑いじわの寄った優しそうな目元。ほんの一時間程の絡みだが、俺はヨリカネに対して好感を抱いていた。というのも、ついさっきロリポップで見た人々からは感じられなかった人間らしさが、ヨリカネにはぷんぷんと匂っているからだ。もちろんそれだけではなく、快活で気立てがよく、まっすぐだ。自分にもこういうところがあったらな、と俺はつくづく思うのだった。
「ま、でも全部忘れちまったほうが楽かもしれねえなあ。ありがたいオプティオン・ルーツが運んで来たのは、メイフィアーとがんじ

がらめのプロトコル、差別だらけのカラーメトリクス、ＪＡＸＡＳの機嫌をうかがいながら生活する毎日なんだからな」
眉を八の字にして、《ブルータンザ》と言われる酒を煽るヨリカネ。
「あ、ねえ、なんとなくはわかってるんだけど、カラーメトリクスってさ、何？」
今まで自分がＶＩＰ待遇されていた理由に、どうもピンと来なかったのもあって、同じようにブルータンザを口に含みつつ尋ねてみる。その名の通り、真っ青なくせにホップのような味がする。まずい。異国のビールというところか。
「あら。そんなことまで覚えてないのか？　それでよくプリーツファインドやろうと――」
「だから！　本当に覚えてないんだよ、何も！」
だって覚えてないというか、本当に何も知らないのだ。なんだか悔しい。
「わ、悪かった、悪かったよ」
でっかい手を俺の顔の前に出して、オーバーアクションでヨリカネは笑うと続ける。
「カラーメトリクスってのは、オプティオン・ルーツの力を使って、個人を認証し、それに価値をつけようってシステムだ。ＪＡＸＡＳ最高責任者エンハンス・ドローによって考案され、構築された。買い物、本人認証、土地の売買、法的手続きまで全てがカラーメトリクスを通じて行われる。レイドに生まれついた以上、これなしで生活する事は叶わない」
「へえ」
俺がカラーメトリクスをロリポップで初めて使った時に感じたのは、〇ディとか、〇ナコとかの電子マネーのようなものだと思った。それでも法的手続きや、土地の売買まで行うってのはさすがに想像しなかったけど。ま、近からず、遠からずってとこか。
「そして、カラーメトリクスには階級が存在するんだ。階級によっ

て、様々な制限があってな、買い物で使える上限や、住居の場所、借りる事のできる家、入る事のできる店だったりな。階級は下から青（ブル）、黄色（ジャッロ）、緑（ベルデ）、赤（ロッソ）、紫（ビオラ）、金色（オーロ）。そしてまったく制限の無い、絶対とされる黒だ」

「え、黒・・・・・？」

「おう。まあ、そうそうお目にかかることなんてねえよ。っていうか見たくもねえ、あんな連中！」

ブルータンザのジョッキを乱暴にテーブルに叩きつけ、憎しみのこもった口調でヨリカネは吐き捨てる。そして俺は反射的に「なんで？」と聞いてしまった。

「メトリクスを通じて人間をネットワークで管理するって言うと、そりゃ確かに聞こえは良い。事実、メイフィアーが起こる以前、階級の無かった時代は犯罪の抑制、減少に繋がっていたし、色々と便利な部分が多かった。でも今は違う。いいか？　階級はそのまま権力に直結するんだ。身分制度と言っても過言じゃない」

「はあ」

「詳しく言うとだな、カルテイルに住む八割の人間は赤（ロッソ）以下のメトリクスだ。残りの２割がそれ以上って事になる。問題なのは、その二割の紫（ビオラ）、金色（オーロ）、絶対の黒（ネロ）の奴らは、自分より下位のカラーを人間だと思っちゃいないってとこだ。奴らは下の人間には横暴の限りを尽くす。そしてその二割はＪＡＸＡＳの関係者がほとんどだ。ついでに言うと、ＪＡＸＡＳはオプティオン・ルーツを使って、この世界を牛耳ってる。これがどういう意味だかわかるか？」

「・・・・・・独裁国家」

「そういうことだ。無茶苦茶な法律で国民を縛って、ＪＡＸＡＳはでかい顔をする。少しでも歯向かえば、変換だ。特にここ何年かは、軽い罪でも変換される人間がやたらと多くなった。いいか、イツキ。おまえも十分に気を付けるんだぞ」

顔を近づけて俺に釘を刺すヨリカネ。酒臭い吐息をもろに浴びて、思わず眉をしかめたが、彼の話には確かに心あたりがあった。

「そうか、あのロリポップの金色って言う男も・・・・・・・」
「どうした？　まさか既になんかやったんじゃ・・・・・・・」
心配そうに顔を覗き込むヨリカネに対して、俺は答える。
「い、いや。おかげさまで目立つ事はなにも」
ほっとしたのか、酔いが回ったのか、ヨリカネは席に深く腰掛けると、タバコに火をつける。
「ま、なんにせよレイドってところは――」
バコォォォォォーーーーーーーンッ！
「いっ！？」
一瞬の出来事だった。俺とヨリカネの座るカウンターバー横の壁を、ついさっきどこかで聞いた轟音と爆風が見事に吹き飛ばし、
「やはりな、射程を網羅しているのだろうが、もう逃げ場はないぞ！　いい加減悪あがきはやめろ！　おとなしく捕まり、検証を受け、変換をさせてもらおうか！」
飛び散る瓦礫や、土ぼこりの中、見れば先程のエンコーダ。それと、
「はあっ、はあっ、何バカな事言ってるの、あたしは正しい事を正しいって言っただけなんだから、裁かれる言われはないわ」
つり上がった大きな瞳に、この勝気なセリフ。吹っ飛ばされた壁と一緒に転がってきたのは、やっぱり彼女らしい。どうやら足を擦りむいているみたいで、血が出ている。
「お、お嬢！？」
ヨリカネはそう言って、彼女に呼びかけた。しかし彼女はチラッとヨリカネを見ると、一瞬目を大きく見開き、すぐに視線をエンコーダに戻した。つまり無視した。
「うん？　なんだおまえは、この女の知り合いか？　これは早急に検証しなければならんな」
エンコーダも二人が知り合いであることに気付いたようで、意地悪い声を出すとニタリと笑った。
「関係ないっ、やめなさいよ！」

「だまれっ！」
まるで耳を貸すつもりはないらしい。次の瞬間、エンコーダは右腰にぶら下げていた特殊警棒を素早く抜き――ヨリカネの頭を思い切り殴りつけた。
「っああ！　ぐっ」
アニメや映画みたいなバキッという音ではなく、ゴフッという低い音。ゴムの塊に漬物石でも落としたような恐ろしい音。ヨリカネはとっさに頭を抑えてしゃがみこんだ。
「よ、ヨリカネ！」
俺はとっさにヨリカネに歩み寄ると、エンコーダを睨みつけたが、ヨリカネは俺の肩に手をやって、大丈夫だ、なんでもない、とでも言うみたいに、弱々しく笑って首を横に振るだけだ。
「ゆっ・・・・・・許さないっ！」
それを見た彼女は、ビリビリと空気を震わせるような声を出したかと思うと、驚く程に素早いフットワークでエンコーダとの距離を一瞬で詰め、すかさず殴りかかった。
左ジャブ、右ストレート、ジャンプして左ミドルキック、そのまま右足をつないでの二段蹴り、着地するや否や間髪入れず体をひねって右拳でバックナックル。彼女の身のこなしを見て俺は目を見張った。すごく稚拙な表現になってしまうけれど、まるで格ゲーのキャラでも見てるようだ。
でも、もっと驚いたのは、その攻撃全てをエンコーダは一切の無駄な動き無く、的確にガードして見せたのだ。まるで、どこに拳が、蹴りが、飛んでくるのかを知っているみたいに。当然攻撃の全てが不発に終わった彼女はバランスを崩す。そこを待ち構えていたみたいにエンコーダの目がいやらしく光ったのを俺は見た。
「やはり貴様のようなバグは、大幅な調教が必要だなあっ！」
エンコーダは彼女の側頭部めがけて警棒を振り下ろした。
「ぐっ！」
彼女はさすがの反射神経で、咄嗟に腕を上げて庇ったが、警棒は

彼女の腕にめり込み、嫌な音を立てた。
思わず彼女はよろける。
「くっ・・・・・・あなた達なんか、ＥＥＧスーツなしじゃ、ろくに闘えもしないくせに・・・・・・！」
「さて、悪あがきもここまでだ。たっぷりと修正した後、変換してやろう」
警棒を手の平でポンポンと鳴らし、余裕たっぷりに笑うエンコーダ。
それとは反対に、腕を押さえ、痛みに堪えながら、相手をキッと睨む彼女はどうひいき目に見ても敗者だ。
なぜだろう。それでも琥珀色の瞳に宿る光は消えていなかった。
ごうごうと燃えているみたいに輝いていた。
彼女は咆哮してみせる。
「何かって言えば、変換だとか、修正だとか。そうやってＪＡＸＡＳの規格に合わない人間にはひどい仕打ちして、蔑んで。あなた達だって同じ人間でしょう？　バグ持ってない人間なんていないんだよ！　みんなそれと闘って生きてるの！　メトリクスだけであたしが何者なのかなんて決めさせない！　あたしは人間だ、修正も変換も必要ない、自分が何者かは自分が決める！」
自分が何者かは自分が決める。
それを聞いた瞬間に、俺の奥底で何かがパチリと鳴った気がした。
「同じだと？　笑わせるな、この潔白の白め（ビアンコ）。おまえらみたいなバグは存在しちゃいかんのだよ！　色の無い者は変換されると決まっている、存在を許されていないんだよ！」
「きゃあっ！」
エンコーダは彼女の髪の毛を乱暴に掴むと、近くのテーブルに無理やり押し付けた。ガシャンッという音がして、グラスが割れる。
「ほら言うんだ。わたしは色の無いクズです、変換してくださいってな」
「だ、誰が言う・・・・・・かあ・・・・・・」

次第に彼女の額に血が滲み始める。彼女は抵抗しようと必死に暴れるが、エンコーダはどんな馬鹿力なのか、決してその手を離さず、高笑いを浮かべる。
俺はそれを目の前に、先ほどから自分の腹の中でパチパチと音を立てる何かが急激に強くなっていくのを感じていた。静電気のようだったそれはだんだんと大きくなり――、
「あだしは・・・・・・あだしは・・・・・・・・闘うッ・・・・・・・」
大粒の涙を流しながら、抗う彼女をスイッチとするみたいに稲妻に変わった。

「がああああああああああっ！」
気付くと俺は走り出していた。
力いっぱい突き出した拳は、思いのほか正確にエンコーダの頬をえぐるように捉えた。
エンコーダは豪快に吹っ飛ぶと、くるくる回って、カウンターに思い切りぶつかると、頭からブルータンザのジョッキを被る。
瞬間、カジノにいた誰もが静止した。
もう自分を押さえつける人間はいないのに、彼女はテーブルに突っ伏したままで、俺を呆然と見つめる。
自分を不安そうに見るヨリカネは口を開けたまま、微動だにしない。
その他大勢の客も、声一つ上げずに息を呑んでいた。
俺は――生まれて初めて振るった拳のじんじんとした熱を感じたまま、大きく息を吸い込むと、声を大にして彼女に言った。
「わからない・・・・・・・オプティオン・ルーツだとか、ＪＡＸＡＳだとか、エンコーダとか、反逆者だとか、メトリクスだとか、ぜんっぜんわからない、意味わかんねえ！　だから君が、何をそんなに必死になってるのかも全然わからない。でも、きっと君にもわからないはず。教師も母さんも決まって俺に聞く！　将来何になりたい？　どこの大学に行きたい？　やっぱり四大を出て一流企業？

将来有望ね。知るかよそんなもん。俺はまだ十六歳で、何の力もなくて、将来どころか、自分の過去もあやふやでわからない！　自分が何がしたいか、何ができるのか、自分がなにをしてきたのかさえもわからない」

俺はぐっと彼女の目を見ると続けた。

「でも！　君のおかげでわかった事がある。きっとみんなそうなんだよ。解らないんだ。だから闘う、何度も何度も繰り返し自分と闘うんだ。それは学力や金や過去だけを見て他人が量る事なんてできやしない。他の何者でもない、自分が決める事なんだろう？」

琥珀色の瞳を再び驚愕の色に染めると、彼女はポツリと言った。

「うそ・・・・・君・・・・・もしかしてさっきのロリポップにいた絶対の黒（ネロ）！？」

それを聞いた途端、周りの連中からも、大きなざわめきが起こった。

「な、なん・・・・・だと！？　こ、こんなガキが絶対の黒（ネロ）だと・・・・・！？」

ようやく身を起こしたエンコーダはふらふらと立ち上がると言った。やがて、その顔がぞっとするような狂気に染まって行く。

「反逆だ、仮に絶対の黒（ネロ）だとしてもこれは立派な反逆罪だぞッ！許さん、変換だッ！」

怒りをみなぎらせ、わめくと、エンコーダは腕の端末を乱暴にタップし始めた。

「は、走れ！　走って逃げるんだっ！」

今まで固まっていたヨリカネは、変換と言う言葉に反応したのか、頭から流れる血を気にも留めず、必死の形相で叫ぶ。

すぐに例の不快なノイズが、ゆっくりと音量と旋律を上げはじめた。

しかし、俺は自分でも信じられない程に冷静だった。

見据えるのはただ、ただ憎たらしいエンコーダの面だ。

俺は奴に腹を立てていた。

「終わりだ！」
ついさっきも聞いたばかりの耳障りなノイズの群れ。
限界まで加速した高音のそれは、まるで怒りを溜め込んだ鬼のように膨らんで、エンコーダの腕を囲い、具現化していく。そしてその蒼い雷光は、
「サァブミィットォオオオオ！」
俺に向けて放たれた。

その瞬間――。

世界は瞬き、色を変えた。
壁が、床が、空中が、ひっくり返したように赤い文字や記号で染まっていく。
まるで時間の流れが変わってしまったみたいに、何もかもが動きをゆるめる。
赤字。そこかしこに配置された情報、ロジック。
言うなれば、創られた理。
この世界に張り巡らされた全て。
なぜだろう全てが手に取るように、感覚で理解することができた。
不思議と驚きはなかった。

ガギィィィィィィンッ！
「・・・・・・な、なんだ今の音は？」
爆風により立ち上る粉塵の中、俺の脳内では想像を絶する膨大な数のソースが処理されている。
「さっきも言ったけど、わかんないね。反逆だとか、変換だとか」
自分を包んでいた粉塵が消えると、俺は顔を上げ、ゆっくりと口を開いた。
「ま、まさか、ブロックしたとでも言うのか・・・・・・？　そんなことはありえん！　く、くそっ、こうなったら――」

想定外の事態か。エンコーダは懸命に腕の機器を叩く。
だけど。俺には見える。世界が教えてくれる。おまえが何をしようとしているのかも、そしてそれを阻止する事も。
「――なっ！？」
小さな爆発音と共にエンコーダの腕の機器は黒い煙を上げる。液晶は割れ、システムは落ちた。もう端末は使えない。
「あ、あ、あ・・・・・・き、貴様ッ！　何者だあッ！？」
丸腰になったエンコーダは怯えるようにこちらを見ると、警棒を右手に構え、後ずさりした。
「俺が何者かって？　アリムネに言わせれば優柔不断で決断力の無い、ちょっと根暗な冴えない男ってところかな・・・・・・」
俺はゆっくりと一歩、また一歩、エンコーダとの距離を詰めて行く。
握りこんだ拳と、爆発しそうな感情。
俺の脳内で竜巻のように加速する文字列とイメージ。
それに連動して目まぐるしく動く、空中に表示された赤字の群れ。
俺は生まれて初めて、心底怒りを感じていた。
まるでそれに呼応するように、テーブルの上のグラスが、食器が、世界が音を立てて揺れはじめる。
地震だ。小さな地震が起こっている。
「な・・・・・・・う、動けない！？　ＥＥＧが落ちているのか！？・・・・・・な、なんだ、なんなんだ貴様はあッ！？」
「もっとシンプルに教えてやろうか？」
もはやゼロ距離。息がかかるほど近くで俺はエンコーダの畏怖に染まった瞳を覗きこむと、大声で言い放った。
「俺は葉倉イツキだッ！」
「がっ、がぐぐぐぐがっ！」
お世辞にも綺麗なフォームとは言い難い、マヌケなアッパーカット。
でも、腹立たしい相手をぶん殴るには、これで十分さ。

歯と歯が、ガチンッという音を立てたかと思うと、エンコーダはそのまま大の字に倒れ、白目を剥き泡を吹いて気絶した。
例えば――、例えば誰かに創られた絶対的なシステムが存在したとする。
でも、もしもその絶対的ロジックをイメージ通りに書き換えることができたなら。
世界をマウントすることができたなら――それはどういう意味を持つんだろうか。
きっとそれは――、
「わあ！　すげえ、まじかよエンコーダをぶっ飛ばしちまったぞ！」
「ていうか、さっきのどうやったんだ？　変換からどうやって逃れたんだ！？」
「それよりもあんた絶対の黒（ネロ）なんだろう？　エンコーダをぶっ飛ばすなんて、良い根性してるなあ」
俺にも話を聞かせろ、待て、俺が。いいや、あたしだってば！
いつのまにかカジノにいた人という人が俺を取り囲んで騒いでいた。
俺はいきなりの事に少しだけ驚いたが、「ちょっとごめんよ」そう言うと群集を押し分けて、ヨリカネの元まで早足で歩み寄った。
「あ・・・・・・」
一番に目に飛び込んで来たのは、ヨリカネが「お嬢」と呼んだ彼女だった。自分もひどい怪我だろうに、シャンと立ち上がり、ヨリカネの肩を抱いて起こそうとしている。俺は言った。
「だ、大丈夫？」
「な、なに？　絶対の黒（ネロ）なんかが気安く声かけないでくれないかな！」
彼女は視線を泳がせると、悪態をつく。絶対の黒（ネロ）ってのがどんな存在なのかも、なんとなく理解したつもりだから、自分に敵意を持っているってのも納得できるけど、こうも露骨だとやりにくい。
「ま、参ったな・・・・・・」
「お、お嬢、イツキは絶対の黒（ネロ）なんか・・・・・・じゃあねえよ。

ち、違う。そうだろ？」
　困っていた俺をフォローしたのか、ヨリカネは閉じていた目をうっすらと開くと、ニヤリと俺に笑いかける。しかし意識が朦朧としているのか、次の瞬間には再び目を閉じていた。

＊＊＊

　コオロギだか鈴虫だか、何の虫だかわからないけれど、涼しげな鳴き声がする。どうやらこっちも秋みたいだ。秋と言えば食欲の秋。そういえば腹減ったなあ。なんて取り留めのないことを考えている俺に、通算五回目の罵声が飛ぶ。
「ねえ、ちょっと！　なんで付いてくるの？」
「だからさあ、俺はメイフィアーの後遺症ってやつで記憶がないんだってさ。どこに行けばいいかもわからないし、それにいくら喧嘩が強いからって、その怪我じゃあ、夜道は危ないと思ってさ・・・・・・」
「君、やっぱりあたしをからかってるんでしょう？　帰りたいなら自分の居住地に帰ればいいじゃない。一級バギーの迎えでも、呼んだらどう？　絶対の黒（ネロ）なんだから、さぞ豪華なお家にお住まいでしょうね。それとも何？　あたしが潔白の白（ビアンコ）だからって、外周の外まで後をつけてきて、ＪＡＸＡＳに密告でもする気？」
　ものすごい剣幕でまくし立てる彼女に、俺はたたらを踏みながら、引きつった笑みで弁解を試みる。
「い、いや。そんなつもりはないよ。ほら、ヨリカネだって君の家の近くに住んでるんだろ？　女の子一人でおぶっていくのは正直キツイと思うよ。それにカラーメトリクスの使い方に関しても今一不安だし。なんせ使ったのは数える程でさ、ご飯食べた後、露天でちょっと買い物して、―ポーンストリートってところに行って――」
「ふーん。―ポーンストリートねえ」
「あっ・・・・・・・」

そうか。―ポーンストリート。あの場所が女の子には良い印象を与えないのは明白だ。俺はしまった、という顔をして、思わず背中におぶったヨリカネを上目で見て助けを求めるが、当然彼は眠ったままだった。

「賭け事に、いやらしいお店。君っていう人間を改めて理解できたよ」

目を細め、道端に落ちている犬のクソでも見るみたいな軽蔑の眼差し。いわゆるジト目。

「ち、違うんだよ、確かにお店には入ったけどね、違うんだ」

「何が違うっていうの？　君はただの――」

「おお、纏、今帰りか？　丁度いい、わしもなんじゃ、一緒に帰ろう。そこにバギーが・・・・・・って、どうしたんじゃ、その怪我は！？」

あれ？　聞き覚えのある声に俺は振り返る。

「おじいちゃん！？　あ、この怪我は、ちょっとね・・・・・・」

罰が悪いとでも言うのか、纏と呼ばれた彼女は視線を落とし、黙り込んだ。

「ちょっとじゃないじゃろうが！　まさか、またビオラや金色（オーロ）に何かしたんじゃないじゃろうな！？」

やっぱり、元親老人だ。間違いない。・・・・・・おじいちゃん。確かにそう言った。という事は、例のメイフィアーの生き残りの・・・・・女の子だったのか。俺は二人の繋がりを瞬時に理解すると、口を開いた。

「本当に危なかったんですよ。こっちがハラハラしました」

「そうじゃ。そうじゃ。イツキ君にも迷惑かけたようじゃな。ヨリカネなんて頭から血を流しておるじゃないか。ん？・・・・・・・・・・・ってイツキ君か！？　っちゅうかヨリカネっ！」

やっぱりボケてるんじゃなかろうか？　俺は苦笑しながらも言う。

「どうも、また会いましたね。まあ、色々とありまして・・・・・・とりあえずヨリカネは命に別状はないみたいです」

それを聞いた元親はホッとした顔をして息をつく。そこに悪態女、纏と呼ばれた彼女は間髪入れずに元親に質問を浴びせる。
「ねえ、おじいちゃん、このスケベ知り合いなの？」
「お、おお。知り合いといえば知り合いじゃな」
待て待て待て！
「ちょ、ちょっとスケベってなんだよ！？　普通の健全な青年だったら少しはそういうところには・・・・・・」
「へえー。昼間っからメトリクスにもの言わせてねえ・・・・・・やっぱり絶対の黒ね。底が見えるわ」
ぐっ。減らず口の王様、王女様め！
「い、いや、昼間ってのはただ単にすることなくて暇だったから・・・・・・」
「やっぱりただのスケベじゃない」
・・・・・・完敗だ。
「かっかっか。因果なものじゃ。して、纏がこんなに誰かと喋っているのは何年ぶりかの？」
隣で俺を睨む王女様と、笑っているボケ気味のじいさん。
一体、俺の行く末はどうなってしまうのだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9346x/

ありふれたリアリティにロジックを

2011年10月26日01時00分発行